

# 高野聖

泉鏡花

青空文庫



「参謀本部編纂の地図をまた繰開いて見るでもなからう、  
 と思つたけれども、余りの道じやから、手を触るさえ暑くるしい、  
 旅の法衣の袖をかかけて、表紙を附けた折本になつてのを引張り出した。

飛騨から信州へ越える深山の間道で、ちようど立休らおうとい  
 う一本の樹立も無い、右も左も山ばかりじや、手を伸ばすと達き  
 そうな峰があると、その峰へ峰が乗り、巔が被さつて、飛ぶ鳥も  
 見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間にただ一人我ばかり、およそ正午と覚しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返った光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、こつこつと凶面を見た。」

旅僧はそういつて、握拳を両方枕に寄せ、それで額を支えながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋からこの越前敦賀の旅籠屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてる限り余り仰向けになつたことのない、つまり傲然として物を見ない質の人物である。

一体東海道掛川の宿から同じ汽車に乗り組んだと覚えている、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰のごとく控えたから別段目にも留

まらなかつた。

尾張おわりの停車場ステイションで他の乗組員ほかは言いい合あわせたように、残らず下り

たので、函はこの中にはただ上人と私と二人になつた。

この汽車は新橋を昨夜九時半に発たつて、今こん夕せき敦賀に入ろうと

いう、名古屋では正午ひるだったから、飯に一折すしの鮓すしを買つた。旅僧

も私と同じくその鮓すしを求めたのであるが、蓋ふたを開けると、ばらば

らと海苔のりが懸かつた、五目飯ちらしの下等なので。

(やあ、人參にんじんと干瓢かんぴょうばかりだ。)と粗忽そそツかしく絶ぜつ叫きよう

した。私の顔を見て旅僧こらは耐え兼ねたものと見える、くつくつと

笑い出した、もとより二人ばかりなり、知ちか己づきにはそれからなつ

たのだが、聞けばこれから越前へ行つて、派ちがは違ちがうが永平寺えいへいじに

訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、

そこで同行の約束が出来た。

かれは高野山に籍を置くものだった、年配四十五六、柔

和ななんらの奇も見えぬ、懐しい、おとなしやかな風采で、

羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟巻をしめ、

土耳其形の帽を冠り、毛糸の手袋を嵌め、白足袋に日和下駄で、

一見、僧侶よりは世の中の宗匠というものに、それよりも

むしろ俗か。

(お泊りはどちらじゃな、) といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿のつまらなさを、しみじみ歎息した、第一盆を持って女

中が坐睡いねむりをする、番頭が空世辞そらせじをいう、廊下ろうかを歩行あるくとじろじろ目をつける、何より最も耐え難いたがたのは晩飯の支度したくが済むと、たちまち灯あかりを行燈あんどんに換かえて、薄暗うすぐらい処でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更ふけるまで寐ねることが出来ないから、その間の心持こころといつたらならない、殊ことにこの頃ごろは夜は長し、東京を出る時から一晩とまりの泊とまりが気いきになつてならないくらい、差支さしつかえがなくなれば御僧おんそうとご一いっしょ所しょに。

快く領うなずいて、北陸地方あんぎやを行脚あんぎやの節はいつでも杖つえを休める香取屋りやといふのがある、旧もとは一軒けんの旅りよてん店てんであつたが、一人女ひとりむすめの評判ひんぱんなのがなくなつてからは看板かんばんを外はずした、けれども昔むかしから懇意こんいな者は断ことわりらず泊とまりめて、老としより人夫婦うぢわが内端うちわに世話をしてくれる、宜よろし

くばそれへ、その代かわりといいかけて、折を下に置いて、

(ご馳走ちそうは人參と干瓢ばかりじゃ。)

とからからと笑った、慎つつしみ深うちみそうな打見よりは氣の軽い。

## 二

岐阜ぎふではまだ蒼空あおぞらが見えたけれども、後は名にし負う北国空、  
米原まいばら、長浜ながはまは薄曇うすぐもり、幽かすかに日が射さして、寒さが身に染みる  
と思つたが、柳ヶ瀬やなせでは雨、汽車の窓が暗くなるに従うて、白い  
ものがちらちら交まじつて来た。

(雪ですよ。)



(さようじやな。) といったばかりで別に気に留めず、仰いで空を見ようともしない、この時に限らず、賤ヶ岳が、といつて、古戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語った時も、旅僧はただ頷いたばかりである。

敦賀で悚毛の立つほど煩わしいのは宿引の悪弊で、その日も期したるごとく、汽車を下ると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、潜抜ける隙もあらずなく旅人を取囲んで、手手に喧しく己が家号を呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰つて、へい難有う様で、を喰わす、頭痛持は血が上るほど耐え切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻しに通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなか

つたから、幸いその後つに跟ついて町へ入つつて、ほつという息を吐ついた。

雪は小止おやみなく、今は雨も交あらず乾かいた軽かいのがさらさらと面おもてを打ち、宵よいながら門かどを鎖とぎした敦賀とおりの通とはひっそりして一条二条縦たてよ横こに、辻つじの角は広々と、白く積たつた中なを、道の程ほど八町ばかりで、とある軒のき下したに辿たどり着きいたのが名指なざしの香取屋。

床とこにも座敷ざしきにも飾かざりといつては無いが、柱はしら立だちの見事たみな、畳たたみの堅かたい、炉ろの大きいなる、自在じざい鍵かぎの鯉こいは鱗うろこが黄金造こがねづくりであるかと思おもわゆる艶つやを持つた、素すばらしい竈へつを二ツ並ならべて一斗飯いっとめしは焚たけそうめざまな目覚めましい釜かまの懸かかつた古家ふるいえで。

亭主ていしゅは法然ほうねん天窓あたま、木綿つつそでの筒袖つづそでの中へ両手りやうての先すくを竦すくまして、

火鉢ひばちの前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁おやし、女房にようぼうの方は愛あい  
 嬌ようのある、ちよつと世辞のいい婆さんばあ、件くだんの人参と干瓢の話を  
 旅僧が打出すと、にこにこ笑いながら、縮緬ちりめんざこ雑魚と、鰈かれいの干物ひものと、  
 とろろ昆布こんぶの味噌汁みそじるとで膳ぜんを出した、物の言いい振取ぶり成なりなど、  
 いかにも、上しょうにん人とは別懇べつこんの間と見えて、連つれの私の居心いごころの  
 いいといつたらない。

やがて二階に寢床ねどこを拵こしらえてくれた、天井てんじょうは低いうつぱりが、梁はりは丸  
 太ふたかかえ抱かかえもあるう、屋むねの棟ななめから斜わたに渡わたつて座敷はての果はての廂ひさしの処  
 では天窓あたまに支つかえそうになっている、巖がんじょう乗やづくりな屋造やづくり、これなら  
 裏うらの山やまから雪崩なだれが来てもびくともせぬ。

特に炬燵こたつが出来ていたから私はそのまま嬉うれしく入いつた。寢床ねどこは

もう一組おなじ炬燵に敷いてあつたが、旅僧はこれには来らず、横に枕を並べて、火の氣のない臥床ねどこに寝た。

寝る時、上人は帯を解かぬ、もちろん衣服も脱ぬがぬ、着たまままる円まるくなつて俯向形うつむきなりに腰からすつぽりと入つて、肩かたに夜具やぐの袖そでを掛かけると手てを突ついて畏かしこまつた、その様子ようすは我々と反対で、顔に枕をするのである。

ほどなく寂然ひっそりとして寐ねに就きそうだから、汽車の中でもくれぐれいったのはこのこと、私は夜が更けるまで寐ねることが出来ない、あわれと思つてもうしばらくつきあつて、そして諸国を行脚はなしなすつた内のおもしろい談はなしをといつて打解うちとけて幼おきならしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に就かぬのが癖くせで、寝るにもこのままではあるけれども目はまだなかなか冴さえて  
 いる、急に寐就かれないのはお前様とおんなじであろう。出家しゅっけ  
 のいうことでも、教おしえだの、戒いましめだの、説法とばかりは限らぬ、若い  
 の、聞かつしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門しゅうもん名  
 譽よの説教師で、六明寺りくみんじの宗朝しゅうちようという大和尚だいおしょうであつたそ  
 うな。

## 三

「今にもう一人ここへ来て寝るそうじやが、お前様と同国じやの、

若狭の者で塗物の旅商人。ぬりもの たびあきんど いやこの男などは若いが感心に実

つてい  
体よな好い男。

わたし  
私が今話の序開じよびらきをしたその飛驒の山越やまごえをやった時の、麓ふもと

の茶屋で一いっしょ緒になつた富山の売薬とやまという奴やつあ、けたいの悪い、

ねじねじした厭いやな壮わかいもの佼いで。

まずこれから峠とうげに掛かろうという日の、朝早く、もつとも先の泊せんとまり

はものの三時ぐらいには発たつて来たので、涼しい内に六里ばかり、

その茶屋までのしたのじやが朝晴でじりじり暑いわ。

よくばり  
慾張よくばり抜ひいて大急ぎで歩いたから咽のどが渴かわいてしようがあるまい、

早さつそく速茶を飲もうと思つたが、まだ湯が沸わいておらぬという。

どうしてその時分じやからというて、めつたに人ひと通どのない

山道、朝顔の咲さいてる内に煙が立つ道理もなし。

床しょうぎ几ぎの前には冷たそうな小流こながれがあつたから手桶ておけの水を汲くもうとしてちよいと気がついた。

それというのが、時節柄暑じせつがらさのため、恐おそろしい悪い病が流行はやつて、先に通つた辻などという村は、から一面に石灰いしばいだらけじやあるまいか。

(もし、姉ねえさん。)といつて茶店の女に、

(この水はこりや井戸いどのござりますか。)と、きまりも悪し、もじもじ聞くと。

(いんね、川のございます。)という、はて面妖めんようなど思つた。

(山したの方には大分流行病はやりやまいがございますが、この水は何なにから、

辻の方から流れて来るのではありませんか。)

(そうでねえ。)と女は何気なく答えた、まず嬉しやと思うと、お聞きなさいよ。

ここに居て、さつきから休んでござったのが、右の売薬じや。

このまた万金丹まんきんたんの下したまわり廻まわりと来た日には、ご存じの通り、千せんす

筋じの単衣ひとえに小倉こくらの帯、当節は時計を挟はさんでいます、脚絆きやはん、股もも

引ひき、これはもちろん、草鞋わらじがけ、千草木綿ちくさもめんの風呂敷包ふろしきづつみの角かどば

ったのを首ゆわに結むすえて、桐油合羽とうゆがっぱを小さく畳たたんでこいつを真田紐さなだひも

で右の包につけるか、小弁慶こべんけいの木綿こもめんの蝙蝠傘こうもりがさを一本、おきま

りだね。ちよいと見ると、いやどれもこれも克明こくめいで分別ぶんべつのあり

そうな顔をして。



これが泊とまりに着くと、大形の浴衣ゆかたに變つて、帯おびひろげで焼しょうちゆう耐たいをちびりちびり遣やりながら、旅籠屋はたごやの女のふとつた膝ひざへ脛すねを上げようという輩やからじゃ。

(これや、法界坊ほうかいぼう。)

なんて、天窓あたまから嘗なめていら。

(異おつなことをいうようだが何かね、世の中の女が出来ねえと相場がきまつて、すつぺら坊主になつてやつぱり生命いのちは欲しいのかね、不思議じゃあねえか、争われねえもんだ、姉さん見ねえ、あれでまだ未練のある内がいいじゃあねえか、)といつて顔を見合せて二人でからからと笑つた。

年紀としは若し、お前様まえさん、私わしは真赤まっかになつた、手に汲んだ川の水

を飲みかねて猶ためら予らつているとね。

ポンと煙管きせるを払はたいて、

(何、遠慮えんりよをしねえで浴びるほどやんなせえ、生命いのちが危くなり

や、薬を遣やらあ、そのために私わしがついてるんだぜ、なあ姉さん。

おい、それだつても無銭ただじゃあいけねえよ、憚はばかりながら神方しんぼう万

金丹、一貼じょう三百だ、欲しくば買いな、まだ坊主に報捨ほうしゃをするよ

うな罪は造らねえ、それともどうだお前まへいうことを肯きくか。)と

いつて茶店の女の背中せなかを叩たたいた。

私わしはそうそうに遁出にげだした。

いや、膝だの、女の背中だのといつて、いけ年としつかまつを仕つた和尚が

業ぎょう体たいで恐おそれ入いるが、話が、話じゃからそこはよろしく。」

## 四

「私も腹立紛れじや、無暗と急いで、それからどんだん山の裾  
 を田圃道へかかる。」

半町ばかり行くと、路がこう急に高くなつて、上りが一力処、  
 横からよく見えた、弓形でまるで土で勅使橋がかかつてるよ  
 うな。上を見ながら、これへ足を踏懸けた時、以前の薬売が  
 すたすたやつて来て追着いたが。

別に言葉も交さず、またものをいったからというて、返事をす  
 る気はこつちにもない。どこまでも人を凌いだ仕打な薬売は流眇

にかけて故わざとらしゆう私わしを通越とおりこして、すたすた前へ出て、ぬつと小山のような路の突とつさき先へ蝙蝠傘を差して立つたが、そのまま向うへ下りて見えなくなる。

その後から爪先つまさき上がり、やがてまた太鼓の胴どうのような路の上へ体が乗った、それなりにまた下りくだじや。

売薬は先へ下りたが立停たちどまつてしきりに四辺あたりをみまわしている様子、執しゅうねん念深く何か巧たくんだかと、快からず続いたが、さてよく見ると仔細しさいがあるわい。

路はここで二条ふたすじになつて、一条いちじようはこれからすぐに坂になつて上りのぼも急なり、草も両方から生茂おいしげつたのが、路傍みちばたのその角かどの処にある、それこそ四抱よかかえ、そうさな、五抱いつかかえもあろうと

いう一本の檜ひのきの、背後うしろへ蜿うねつて切出したような大巖おおいわが二ツ三ツ  
 四ツと並んで、上の方へ層かさなつてその背後へ通じているが、私わしが  
 見当をつけて、心組こころぐんだのはこつちではないので、やつぱり今  
 まで歩いて来たその幅はばの広いなだらかな方が正ましく本道、あと二  
 里足らず行けば山になつて、それからが峠になるはず。

と見ると、どうしたことかさ、今いうその檜ひのきじゃが、そこらに  
 何もなんにない路を横断よこぎつて見果みはてのつかぬ田圃なかぞらの中、空にじへ虹にじのように突  
 出ている、見事ねがたな。根方ねがたの処ところの土くずが壊れて、大鰻おおうなぎを捏こねたよう  
 な根が幾筋ともなく露あらわれた、その根から一筋の水がさつと落ちて、  
 地の上へ流れるのが、取つて進もうとする道の真中に流なが出がれたして  
 あたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どうどうと瀬せになつて、前途ゆくてに  
 一ひとむら叢やぶの藪やぶが見える、それを境まじりにしておよそ二町ばかりの間まる  
 で川かわじゃ。礫こいしはばらばら、飛石とびいしのようにひよいひよいと大跨おおまたで  
 伝えつたそうにずつと見みごたえのあるのが、それでも人の手で並べた  
 に違ちがいはない。

もつとも衣服きものを脱いで渡るほどの大事だいじなものではないが、本街道  
 にはちと難儀なんぎ過ぎて、なかなか馬うまなどが歩行あるかれる訳わけのものでは  
 ないので。

売薬うりやくもこれで迷つたのであろうと思う内、切放きりはなれよく向むきを変か  
 えて右の坂さかをすたすたと上りはじめた。見る間まに檜ひのきを後うしろに潜くぐり抜  
 けると、私わしが体の上あたりへ出て下を向き、

（おいおい、松本まつもとへ出る路はこつちだよ、）といつて無造作むぞうさくに  
また五六歩。

岩の頭へ半身を乗出して、

（茫然ぼんやりしていると、木精こだまが攫さらうぜ、昼間だつて容赦ようしやはねえよ。）  
と嘲あざけるがごとく言い棄すてたが、やがて岩の陰かげに入つて高い処の草  
に隠かくれた。

しばらくすると見上げるほどな辺あたりへ蝙蝠傘の先が出たが、木の  
枝えだとすれすれになつて茂しげみの中に見えなくなつた。

（どっこいしょ、）と暢気のんきなかけ声で、その流の石の上を飛とび々とび  
に伝つて来たのは、莫塵ごごの尻しり当あてをした、何にもつけない天秤てんびん  
棒ぼうを片手で担ひやくしやういだ百姓ひやくしやうじゃ。」

## 五

「さつきの茶店ちやみせからここへ来るまで、売薬の外は誰だれにも逢あわな  
んだことは申上げるまでもない。

今別ぎわれ際に声を懸かけられたので、先方むこうは道中の商売人と見ただ  
けに、まさかと思つても氣迷きまよいがするので、今朝けさも立ちぎわによ  
く見て来た、前にも申す、その図面をな、ここでも開けて見よう  
としていたところ。

(ちよいと伺うかがいとう存じますが、)

(これは何でござりまする、)と山国の人などは殊ことに出家と見る



と丁寧ていねいにいつてくれる。

(いえ、お伺い申しますまでもございませんが、道はやつぱりこれを素直まつすぐに参るのでございませうな。)

(松本へ行かつしやる？ あああ本道じゃ、何ね、この間の梅つ雨ゆに水が出て、とてつもない川さ出来たでがすよ。)

(まだずつとどこまでもこの水でございませうか。)

(何のお前様、見たばかりじゃ、訳はござりませぬ、水になつたのは向うのあの藪おなじまでで、後はやつぱりこれと同一道筋で山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは旧もと大きいお邸やしきの医者様の跡でな、ここいらはこれでも一つの村でがした、十三年前の大水の時、から一面に野良のらになりましたよ、人ひと死しもいけえこと。

ご坊ぼうさま様歩ある行きながらお念仏でも唱えてやってくれさつしやい。と問とわぬことまで深しんせつ切つに話はなします。それでよく仔しさい細さいが解わかつて確たしかになりはなつたけれども、現いまに一人踏ふみ迷まよつた者ものがある。

(こちらの道みちはこりやどこへ行くので、)といいつて売う薬やくの入いつた左ひだり手ての坂さかを尋たずねて見たみた。

(はい、これは五十年ばかり前まえまでは人あが歩ある行いた旧ふる道みちでがす。

やっぱり信州へ出いまする、先まは一つで七里ばかり総すべ体たい近ちかうござり  
まする、いや今いま時とき往い来らいの出来いるのじやあござりませぬ。去年も  
ご坊ぼうさま様、親おや子こ連づれの巡じゆんれい 礼らいが間ま違ちがえて入いつたというで、はれ大お変つ  
な、乞こ食じきを見みたような者ものじやというて、人命にんめいに代たりはねえ、追おか  
けて助たすけべえと、巡おまわり査さ様さまが三人、村むらの者ものが十二人、一組になつ

てこれから押登つて、やっと連れて戻もどつたくらいですが。ご坊様も血氣はやに逸はつて近道をしてはなりませんねえぞ、草臥くたびれて野宿をしてからがここを行かつしやるよりはましでござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。

ここで百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたがふと猶たぬら予つたのは売薬の身の上で。

まさかに聞いたほどもあるまいが、それが本当ならば見殺みごろしじゃ、どの道私は出家しゅつけの体、日が暮くれるまでに宿へ着いて屋根の下に寝るには及およばぬ、追おつついて引戻してやろう。罷まかり違ちごうて旧道を皆歩ある行あいても怪けしゆうはあるまい、こういう時候おおかみじゃ、狼しゆんの匂ちみでもなく、魑魅魍魎ちみもうりようの汐しおさきでもない、ままよ、と思つて、

見送ると早はや深切な百姓の姿も見えぬ。

(よし。)

思おも切いきつて坂道を取つて懸かつた、俠おとこ氣こがあつたのではござら

ぬ、血氣はに逸はやつたではもとよりのない、今申したようではずつとも

悟さとつたようじゃが、いやなかなかの臆おく病び者もの、川の水を飲む

のさえ氣が怯ひけたほど生命いのちが大事で、なぜまたと謂いわつしやるか。

ただ挨あい拶さつをしたばかりの男なら、私は実のところ、打うち棄ちつ

ておいたに違ちがいはないが、快からぬ人と思つたから、そのまま

見棄みてるのが、故わざとするようで、氣が責めてならなんだから、

と宗朝はやはり俯うつ向むけに床とこに入ったまま合がっ掌しょうしていった。

「それでは口でいう念仏にも済まぬと思うてさ。」

## 六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜ひのきの裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹きの中を潜くぐつて草深い径こみちをどこまでも、どこまでも。

するといつの間にか今上つた山は過ぎてまた一ツ山ちかづが近ちかづいて来た、この辺あたりしばらくの間は野が広々として、さつき通つた本街道よりもつと幅の広い、なだらかな一筋道。

心こころもち持もち西と、東と、真まんなか中なかに山を一ツ置いて二ふた一すじ条並んだ路のような、いかさまこれならば槍やりを立てても行列が通つたである

う。

この広<sup>ひろ</sup>ツ場<sup>ば</sup>でも目の及ぶ限り芥<sup>け</sup>子<sup>し</sup>粒<sup>つぶ</sup>ほどの大<sup>おお</sup>き<sup>き</sup>の売<sup>う</sup>薬<sup>やく</sup>の姿<sup>すがた</sup>も見  
ないで、時々焼けるような空を小さな虫が飛び歩<sup>ある</sup>行<sup>い</sup>いた。

歩<sup>ある</sup>行<sup>い</sup>くにはこの方が心細い、あたりがぼツとしていると便<sup>た</sup>が<sup>より</sup>な

いよ。もちろん飛<sup>ひ</sup>驛<sup>だ</sup>越<sup>こ</sup>と銘<sup>めい</sup>を打<sup>う</sup>つた日には、七里に一軒十里に五

軒という相場、そこで粟<sup>あわ</sup>の飯<sup>い</sup>にありつけば都合<sup>じよう</sup>も上<sup>う</sup>の方<sup>かた</sup>というこ

とになっております。それを覚<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>のことで、足は相応に達<sup>たつ</sup>者<sup>しや</sup>、い

や屈<sup>くつ</sup>せずに進<sup>すす</sup>んだ進<sup>すす</sup>んだ。すると、だんだんまた山<sup>やま</sup>が両<sup>りやう</sup>方<sup>かた</sup>から逼<sup>せま</sup>

つて来て、肩<sup>かた</sup>に支<sup>つか</sup>えそうな狭<sup>せま</sup>いとこになった、すぐ<sup>の</sup>に上<sup>ぼり</sup>。

さあ、これからが名<sup>な</sup>代<sup>だい</sup>の天<sup>あも</sup>生<sup>もう</sup>峠<sup>とうげ</sup>と心得<sup>こころえ</sup>たから、こつちもその気

になつて、何<sup>なん</sup>しろ暑<sup>あつ</sup>いので、喘<sup>あえ</sup>ぎながらまず草<sup>わらじ</sup>鞋<sup>じ</sup>の紐<sup>ひも</sup>を緊<sup>しめ</sup>直<sup>なお</sup>し

た。

ちようどこの上のぼりぐちの辺に美濃みのの蓮大寺れんだいじの本堂の床下ゆかしたま  
で吹抜けふきぬの風穴かざあながあるということを年経としたってから聞きました、  
なかなかそこどころの沙汰さたではない、一いっし生懸命しょうけんめい、景色けしきも奇跡きせき  
もあるものかい、お天気さえ晴れたか曇ったか訳が解らず、目まじ  
ろぎもしないですたすと捏こねて上のぼる。

とお前様お聞かせ申す話は、これからじゃが、最初に申す通り  
路みちがいかにも悪い、まるで人が通いそうでない上に、恐いのは、  
蛇へびで。両方くさむらの叢くさむらに尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡している  
ではあるまいか。

私わしは真ま先まさきに出で会くわした時は笠かさを被かぶつて竹杖たけづえを突ついたまま、

はツと息を引いて膝ひざを折ひつて坐すわつたて。

いやもう生しょうとく得だい大きらい嫌きら、嫌きらというより恐怖こわいのでな。

その時はまず人助けにずるずると尾を引いて、向うで鎌かまくび首くびを上げたと思うと草をさらさらと渡つた。

ようよう起おき上あつて道の五六町も行くと、またおなじように、

胴どうなか中なかを乾かわかして尾も首も見えぬのが、ぬたり！

あツというて飛退とびのいたが、それも隠れた。三度目に出会つたの

が、いや急には動かず、しかも胴体の太さ、たとい這出はいだしたところまでぬらぬらとやられてはおよそ五分間ぐらい尾を出すまでに間まがあると思う長虫と見えたので、やむことをえず私わしは跨またぎ越こした、とたんに下した腹つぱらが突張つっぱつてぞツと身の毛、毛穴うろこが残こらず鱗こ



に変わつて、顔の色もその蛇のようになってたろうと目を塞ふさいだくらしい。

絞しほるような冷汗ひやあせになる気味の悪さ、足が竦すくんだというて立つていられる数すうではないからびくびくしながら路を急ぐとまたしても居たよ。

しかも今度のは半分ひつきに引切つてある胴から尾ばかりの虫じゃ、切口あおみが蒼あおを帯びてそれでこう黄色しるな汁が流れてびくびくと動いたわ。

我を忘れてばらばらとあとへ遁にげ帰かえつたが、気が付けば例のがまだ居るであろう、たとい殺されるまでも二度とはあれを跨またぐ気はせぬ。ああさっきのお百姓がものの間まち違がいでも故道ふるみちには蛇が

こうといつてくれたら、地獄じごくへ落ちても来なかつたにと照りつけられて、涙なみだが流れた、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏、今でもぞつとする。」と額に手を。

## 七

「果はてしが無いから肝きもを据すえた、もとより引返す分ではない。旧もとどころの処ところにはやっぱり丈じょうた足たらずの骸むくろがある、遠くへ避さけて草の中へ駈かけ抜けたが、今にもあとの半分が絡まといつきそうたまで耐たらぬから氣き臆おくれがして足が筋張すじばると石つますに躓つまずいて転んだ、その時膝ひざ節ぶしを痛めまし  
たものと見える。

それからがくがくして歩行くのが少し難<sup>なんじゆう</sup> 渋<sup>しぶ</sup>になつたけれども、ここで倒れては温氣<sup>うんき</sup>で蒸殺<sup>むしころ</sup>されるばかりじやと、我身<sup>わがみ</sup>で我身を激<sup>はげ</sup>まして首筋を取つて引立てるようにして峠の方へ。

何しろ路傍<sup>みちばた</sup>の草いきれが恐<sup>おそ</sup>しい、大鳥の卵見たようなものな  
んぞ足許<sup>あしもと</sup>にごろごろしている茂り塩梅<sup>あんばい</sup>。

また二里ばかり大蛇<sup>おろち</sup>の蜿<sup>うね</sup>るような坂を、山懐<sup>やまぶところ</sup>に突<sup>つき</sup>当<sup>あた</sup>つて  
岩角を曲つて、木の根を繞<sup>めぐ</sup>つて参<sup>まゐ</sup>つたがここのことで余りの道じ  
やつたから、参謀<sup>さんぼう</sup>本部の絵図面を開いて見ました。

何やつぱり道はおんなじで聞いたにも見たのにも変<sup>かわ</sup>はない、旧  
道はこちらに相違はないから心遣<sup>こころや</sup>りにも何にもならず、もとよ  
り歴<sup>れつき</sup>とした図面というて、描<sup>か</sup>いてある道はただ栗<sup>くり</sup>の毬<sup>いが</sup>の上へ赤い

筋が引張つてあるばかり。

難儀なんぎさも、蛇も、毛虫も、鳥の卵も、草いきれも、記してあるはずはないのじゃから、さつぱりと畳たたんで懐ふところに入れて、うむこの乳の下へ念仏を唱え込んで立直つたはよいが、息も引かぬ内うちに情なさけな無い長虫が路を切つた。

そこでもう所しよせん詮かな叶わぬと思つたなり、これはこの山の霊れいであろうと考えて、杖を棄すてて膝を曲げ、じりじりする地つちに両手をついて、

（誠に濟みませぬがお通しなすつて下さりまし、なるたけお午睡ひるねの邪魔じやまになりませぬようにそつと通行いたしまする。

ご覽らんの通り杖も棄てました。）と我折がれしおしみじみと頼んで額を

上げるとぎつという凄じい音で。

こころもち

心持よほどの大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈

余、だんだんと草の動くのが広がつて、傍の溪へ一文字にさつと

靡いた、

はてみね

果は峰も山も一斉に揺いだ、

ゆる

恐毛を震つて

おぞげふる

立竦むと涼

しさが身に染みて、気が付くと山風よ。

やまおろし

この折から聞えはじめたのはどつという山彦に伝わる響、ちよ

こだま

ひびき

うど山の奥に風が渦巻いてそこから吹起る穴があいたように感

うづま

ふきおこ

じられる。

何しろ山靈感応あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくな

しの

つたので、気も勇み足も撈取つたが、ほどなく急に風が冷たくな

いさ

はかど

つた理由を会得することが出来た。

えとく

というのは目の前に大森林があらわれたので。

世の譬にもたとへ天生峠はあもう蒼空に雨が降るといふ、人の話にもかみよ神代からそま杣が手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは余り樹がなさ過ぎた。

今度は蛇のかわりにかに蟹が歩きそうわらじで草鞋が冷えた。しばらくすると暗くなつた、杉、松、えのき榎とところどころ処々見分けが出来るばかりに遠い処からかすか幽に日の光の射すあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森をいと射通すぐあい工合であろう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい処があつた。

時々爪つまさき尖に絡まるのは葉の雫しずくの落溜おちたまつた糸のような流ながれで、これは枝を打つて高い処を走るので。ともするとまた常磐木ときわぎが落

葉する、何の樹とも知れずばらばらと鳴り、かさかさと言がして  
 ぱつと檜ひのきがさ 笠かさ にかかるともある、あるいは行過ぎた背後へこ  
 ぼれるのもある、それ等は枝から枝に溜たまつていて何十年ぶりでは  
 じめて地の上まで落ちるのか分らぬ。」

## 八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯ひきようなようでも修しゆぎよう 行ぎやうの  
 積みぬ身には、こういう暗い処の方がかえつて觀念たよりに便たよりがよい。  
 何しろ体が凌しのぎよくなつたために足の弱よわりも忘れたので、道も大き  
 に撈取はかどつて、まずこれで七分は森の中を越したろうと思う処で五

六尺天窓あたまの上らしかった樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち留まつたものがある。

なまりおもり鉛の錘かとおもう心持、何か木の實でもあるかしらんと、二度振つてみたが附着くっついていてそのままには取れないから、何心なく手をやって掴つかむと、滑なめらかに冷ひやりと来た。

見ると海鼠なまこを裂さいたような目も口もない者じゃが、動物には違ちがいない。不気味で投出しようとするとずるずると辻すべつて指の尖さきへ吸ついてぶらりと下つた、その放れた指の尖から真赤な美しい血が垂たらたらと出たから、吃驚びつくりして目の下へ指をつけてじつと見ると、今折曲げた肱ひじの処へつるりと垂懸たれかかっているのは同形おなじかたちをした、幅が五分、丈たけが三寸ばかりの山海鼠やまなまこ。



呆氣あつけに取られて見る見る内に、下の方から縮みながら、ぶくぶくと太つて行くのは生血いきちをしたたかに吸込いぼむせいで、濁にごつた黒い滑らかな肌はだに茶褐色ちやかっしよくの縞しまをもつた、疣いぼ胡瓜きゅうりのような血を取る動物、こいつは蛭ひるじゃよ。

誰たが目にも見違えるわけのものではないが、凶拔ずぬけて余り大きいからちよつとは気がつかぬであつた、何なの畠はたけでも、どんな履歴りれきのある沼ぬまでも、このくらいな蛭はあろうとは思われぬ。

肱ひじをばさりと振ふるつたけれども、よく喰くい込んだと見えてなかなか放れそうにしないから不気味ぶきみながら手で抓つまんで引切ると、ぷつりといつてようよう取れる、しばらくも耐たまつたものではない、突いきな然り取りつて大地たたいへ叩たたきつけると、これほどの奴等やつらが何万となく巢

をくつて我わがものにしていようという処、かねてその用意はして  
 と思われるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔やわらかい、潰つぶれそう  
 にもないのじや。

ともはや頸えりのあたりがむずむずして来た、平手ひらてで扱こいて見ると横よ  
こなで撫なでに蛭せなの背せなをぬるぬるとすべるといふ、やあ、乳ちちの下ひそへ潜ひそんで  
 帯おビの間にも一疋びき、蒼あおくなつてそつと見ると肩の上にも一筋。

思おもわず飛と上あつて総そうしん身みを震ふるいながらこの大枝おほえだの下したを一散ひとにかけ  
 ぬけて、走りながらまず心覚こころえの奴やつだけは夢むちゆう中ちゆうでもぎ取とつた。

何なににしても恐おそしい今の枝えだには蛭むしが生なつているのであるとあま  
 りの事ことに思おもつて振返かえると、見返みかえつた樹きの何なにの枝えだか知らずやつぱり  
 幾いくツくといふこともない蛭むしの皮かわじや。

これはと思う、右も、左も、前の枝も、何の事はないまるで充満つばい。  
満つばい。

私は思わず恐怖きょうふの声を立てて叫さけんだ、すると何と？ この時は目に見えて、上からぼたりぼたりと真黒な瘦やせた筋の入った雨が体へ降かかって来たではないか。

草鞋はを穿はいた足の甲ここうへも落ちた上へまた累かさなり、並なんだ傍わきへまたくつつ附着つまさきいて爪つまさき先も分らなくなった、そうして活いきてると思うだけ脈を打って血を吸うような、思いなしか一ツ一ツ伸のびちぢみ縮ちぢみをするようなのを見るから気が遠くなつて、その時不思議な考えが起きた。

この恐おそしい山やま蛭むしは神代かみよの古いにしえからここたむろに屯たむろをしていて、人の来

るのを待ちつけて、永い久しい間にどのくらい何斛かの血を吸うと、そこでこの虫の望のぞみが叶かなう、その時はありつたけの蛭が残らず吸っただけの人間の血を吐出はきだすと、それがために土がとけて山一ツ一面に血と泥どろとの大沼にかわるであろう、それと同時にここに日の光を遮さえぎつて昼もなお暗い大木が切きれぎれに一ツ一ツ蛭になつてしまふのに相違そういないと、いや、全くの事で。」

## 九

「およそ人間が滅びるのは、地球の薄うす皮かわが破れて空から火が降るのでなければ、大海が押お被つかぶさるのでもない、飛驒ひだのくに国の樹き

ばやし  
林が蛭になるのが最初で、しまいには皆血と泥の中に筋の黒い虫が泳ぐ、それが代がわりの世界であろうと、ぼんやり。

なるほどこの森も入口では何の事もなかったのに、中へ来るとこの通り、もつと奥深く進んだら早や残らず立樹の根の方から朽ちて山蛭になつていよう、助かるまい、ここで取殺される因縁らしい、取留めのない考えが浮んだのも人が知死期に近いからだとふと気が付いた。

どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見ておこうと、そう覚悟がきまつては気味の悪いも何もあつたものじゃない、体中珠数生になつたのを手当次第に掻い除け撈り棄て、抜き取りなどして、手

を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂う形で歩行き出した。

はじめの中はうち一廻も太つたように思われて痒さが耐らなか

つたが、しまいにはげつそり瘦せたと感じられてずきずき痛んで

ならぬ、その上を容赦なく歩行く内にも入交りに襲いおつた。

既に目も眩んで倒れそうになると、禍はこの辺が絶頂であつた

と見えて、隧道を抜けたように、遙に一輪のかすれた月を拝

んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空の下へ出た時には、何のことも忘れて、砕ける、微

塵になれと横なぐりに体を山路へ打倒した。それでからもう砂

利でも針でもあれと地へこすりつけて、十余りも蛭の死骸を引く

りかえした上から、五六間向うへ飛んで身顛をして突立った。

人を馬鹿ばかにしているではありませんか。あたりの山ではところど処

ころひぐらしどの  
々 茅蝮殿、血と泥の大沼になろうという森を控ひかえて鳴いてい

る、日は斜ななめ、溪底たにそこはもう暗い。

まずこれならば狼の餌食になつてもそれは一ひと思おもひに死なれる

からと、路はちようどだらだら下おりなり、小僧さん、調子はずれに

竹の杖を肩にかついで、すたこら遁にげたわ。

これで蛭に悩まされて痛いのか、痒かゆいのか、それとも擦くすくすつたい

のえか得えもいわれぬ苦しみさえなかつたら、嬉うれしさに独ひとり飛驒山越ひだやまこえ

の間道かんどうで、お経きやうに節ふしをつけて外道踊げどうおどりをやつたであろう、ちよ

つと清心丹せいしんたんでも嚙かみ碎くだいて疵きず口ぐちへつけたらどうだと、だいぶ

世の中の事に気がついて来たわ。抓つねつても確たしかに活返いきかえったのじゃ

が、それにしても富山の薬売はどうしたろう、あの様子ではとうに血になつて泥沼に。皮ばかりの死骸は森の中の暗い処、おまけに意地の汚い下司な動物が骨までしゃぶろうと何百という数でのしかかつていた日には、酢をぶちまけても分る氣遣はあるまい。こう思っている間、件のだらだら坂は大分長かった。

それを下り切ると流が聞えて、とんだ処に長さ一間ばかりの土橋がかかっている。

はやその谷川の音を聞くと我身で持余す蛭の吸殻を真逆さまに投込んで、水に浸ひたしたらさぞいい心地こころであろうと思うくらい、何の渡りかけて壊れたらそれなりけり。

危いとも思わずにずっと懸る、少しぐらぐらしたが難なく越し



た。向うからまた坂じや、今度は上りさ、ご苦労千万。」

## 十

「とてもこの疲れようでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途に、ヒイインと馬の嘶くのが、何だ、何だ、と聞えた。

馬士が戻るのか、小荷駄が通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の経つたは僅じやが、三年も五年も同一ものをいう人間とは中を隔てた。馬が居るようではともかくも人里に縁があると、これがために気が勇んで、ええやつと今一揉。

一軒の山家の前へ来たのには、さまで難儀は感じなかつた。夏

のことで戸障子のしまりもせず、殊ことに一軒家、あけ開いたなり門  
 というてもない、突いきなり然やれえん破縁えんになつて男が一人、私わしはもう何の  
 見境もなく、

(頼たのみます、頼みます、) というさえ助たすけを呼ぶような調子で、取と  
 りすが  
 縋すらぬばかりにした。

(ご免めんなさいまし、) といったがものもいわない、首筋をぐつた  
 りと、耳を肩で塞ふさぐほど顔を横にしたまま小兒こどもらしい、意味のな  
 い、しかもぼつちりした目で、じろじろと門に立ったものを瞻みつめ  
 る、その瞳ひとみを動かすさえ、おつくうらしい、氣の抜けた身の持方。  
 裾すそ短みじかで袖そでは肱ひじより少い、糊氣のりけのある、ちゃんちゃんを着て、  
 胸のあたりで紐ひもで結ゆわえたが、一ツ身のものを着たように出ツ腹の

太<sup>じし</sup>り肉<sup>たいこ</sup>、太鼓<sup>たいこ</sup>を張<sup>ひ</sup>つたくらいに、すべすべとふくれてしかも出臍<sup>でべそ</sup>という奴<sup>やつ</sup>、南<sup>かぼちや</sup>瓜<sup>へた</sup>の帯<sup>いぎよう</sup>ほどな異<sup>いぎよう</sup>形<sup>いぎよう</sup>な者を片手<sup>いじくりながら</sup>でいじくりながら幽<sup>ゆうれい</sup>霊<sup>れい</sup>の手つきで、片手を宙<sup>そら</sup>にぶらり。

足<sup>あし</sup>は忘<sup>わす</sup>れたか投<sup>な</sup>出した、腰<sup>こし</sup>がなくば暖簾<sup>のれん</sup>を立てたように畳<sup>たた</sup>まれ  
 そうな、年<sup>とし</sup>紀<sup>き</sup>がそれでいて二十二三、口<sup>くち</sup>をあんぐりやつた上<sup>うわくち</sup>  
 唇<sup>びる</sup>で卷<sup>ま</sup>込<sup>こ</sup>めよう、鼻<sup>び</sup>の低<sup>ひ</sup>さ、出<sup>で</sup>額<sup>びたい</sup>。五<sup>ご</sup>分<sup>ぶ</sup>刈<sup>がり</sup>の伸<sup>の</sup>びたのが前<sup>まへ</sup>は  
 鶏冠<sup>とさか</sup>のごとくになつて、頸<sup>えり</sup>脚<sup>あし</sup>へ撥<sup>は</sup>ねて耳<sup>みみ</sup>に被<sup>かぶ</sup>つた、唾<sup>おし</sup>か、白<sup>ばか</sup>痴<sup>か</sup>  
 か、これから蛙<sup>かえる</sup>になろうとするような少年<sup>せうねん</sup>。私<sup>わし</sup>は驚<sup>おど</sup>いた、こつち  
 の生命<sup>いのち</sup>に別<sup>わか</sup>条<sup>じょう</sup>はないが、先<sup>さき</sup>方<sup>さま</sup>様<sup>さま</sup>の形<sup>ぎよう</sup>相<sup>そう</sup>。いや、大<sup>おお</sup>別<sup>べつ</sup>条<sup>じょう</sup>。  
 (ちよいとお願い申<sup>まを</sup>します。)

それでもしかたがないからまた言葉<sup>ことば</sup>をかけたが少しも通<sup>と</sup>ぜず、

ばたりというわずかと僅もに首の位置をかえて今度は左の肩を枕まくらにした、口の開もいてること旧のごとし。

こういうのは、悪くすると突いきなり然ひねふんづかまえて臍ひねを捻ひねりながら返事なのかわりに嘗なめようも知れぬ。

私わしは一足退すきつたが、いかに深山だといつてもこれを一人で置くという法はあるまい、と足を爪つまだ立てて少し声こわだか高たかに、

(どなたぞ、ご免なさい、) といった。

背戸せどと思うあたりで再び馬いななの嘶いななく声。

(どなた、) と納戸なんどの方でいったのは女なむさんぼうじゃから、南無三宝、この白い首うろこには鱗うろこが生えて、体ゆかは床はを這はつて尾おしりをずると引ひいて出でようと、また退すきつた。

(おお、お坊様<sup>ほうさま</sup>。)と立<sup>たち</sup> 頭<sup>あらわ</sup>れたのは小造<sup>こづくり</sup>の美しい、声も清<sup>すず</sup>しい、ものやさしい。

私<sup>わし</sup>は大息<sup>たいしつ</sup>を吐<sup>つ</sup>いて、何にもいわず、

(はい。)と頭<sup>つむり</sup>を下げましたよ。

婦人<sup>おんな</sup>は膝<sup>ひざ</sup>をついて坐<sup>すわ</sup>つたが、前<sup>まへ</sup>へ伸<sup>のび</sup>上<sup>あが</sup>るようにして、黄昏<sup>たそがれ</sup>にしよんぼり立<sup>た</sup>つた私<sup>わし</sup>が姿<sup>すがた</sup>を透<sup>す</sup>かして見て、

(何か用<sup>よう</sup>でござんすかい。)

休<sup>やす</sup>めともいわずはじめから宿<sup>しゆく</sup>の常世<sup>つねよ</sup>は留<sup>る</sup>守<sup>す</sup>らしい、人<sup>ひと</sup>を泊<sup>と</sup>めな  
いときめたもののように見える。

いい後<sup>おく</sup>れてはかえつて出<sup>で</sup>そびれて頼<sup>たの</sup>むにも頼<sup>たの</sup>まれぬ仕<sup>し</sup>誼<sup>ぎ</sup>にもなることと、つかつかと前<sup>まへ</sup>へ出<sup>で</sup>た。

ていねい  
 丁寧に腰を屈めて、

(私は、山越で信州へ参ります者ですが旅籠はたごのございます処まではまだどのくらいでございましょう。)

## 十一

(あなたまだ八里余あまりでございますよ。)

(その他ほかに別に泊めてくれます家うちもないのでしようか。)

(それはございけません。)<br>
 (といいながら目またたきもしないで清すずしい目で私わしの顔をつくづく見ていた。)

(いえもう何でございます、実はこの先一町行け、そうすれば上

段の室へやに寝かして一晩扇あおいでいてそれで功德くどくのためにする家があると承うけたまわりましても、全くのところ一足も歩行あるけますのではございません、どこの物置ものおきでも馬小屋すみの隅すみでもよいのでございますから後生ごしょうでございます。とさつき馬いななが嘶いなないたのは此家ここより外にはないと思つたから言つた。

婦人おんなはしばらく考えていたが、ふと傍わきを向いて布ふの袋くろを取つて、膝ひざのあたりに置いた桶おけの中へざらざらと一幅ひとはば、水を溢こぼすようにあけて縁ふちをおさえて、手で掬すくつて俯向うつむいて見たが、

（ああ、お泊め申しましょう、ちようど炊たいてあげますほどお米もございますから、それに夏なつのことで、山家は冷えましても夜のものにござい自由もござんすまい。さあ、ともかくもあなた、お上

り遊ばして。)

というと言葉の切れぬ先にどつかと腰を落した。婦人はつと身を起して立つて来て、

(お坊様、それでござんすがちよつとお断り申しておかねばなりません。)

はつきりいわれたので私はびくびくもので、

(はい、はい。)

(いいえ、別のことじやござんせぬが、私は癖として都の話聞くのが病でござい、口に蓋をしておいでなさいましても無理やりに聞こうといたしますが、あなた忘れてもその時間かして下さいますな、ようござんすかい、私は無理にお尋ね申します、あ



あなたはどうしてもお話しなさいませぬ、それを是非にと申しましても断たつておつしやらないようにきつと念を入れておきますよ。）  
と仔細しさいありげなことをいった。

山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人おんなの言葉とは思  
うたが保つにむずかしい戒かいでもなし、私はただ領うなずくばかり。

（はい、よろしゅうございます、何事もおつしやりつけは背そむきま  
すまい。）

おんな  
婦人は言ごんか下に打うちと解けて、

（さあさあ汚きたのうございませぬが早くこちらへ、お寛くつろぎなさいまし、  
そうしてお洗せんそく足を上げましようかえ。）

（いえ、それには及びませぬ、雑ぞうきん巾をお貸し下さいまし。ああ、

それからもしそのお雑巾ついで次手にしほずツぷりお絞しほんなすつて下さると  
助たすります、途とちゆう中で大變な目に逢あいましたので体うつつちやりを打棄うちりたいほ  
ど気味おそれが悪うございませうので、一ツ背中ふを拭ふこうと存ぞんじます、  
恐おそれ入いりますな。）

（そう、汗あせにおなりなさいました、さぞまあ、お暑うござんした  
でしょう、お待ちなさいまし、旅籠はたごへお着ちかき遊あそばして湯にお入い  
りなさいませうのが、旅するお方には何よりご馳走ちそうだと申ましますね、  
湯どころか、お茶ちやさえ碌ろくにおもてなしもいたされませんが、あの、  
この裏うらの崖がけを下くだりますと、綺麗きれいな流ながれがございませうからいつそそれ  
へいらつしやつてお流ながれしがよろしゆうございませう。）

聞きいたただけでも飛とんでも行いきたい。

(ええ、それは何より結構でございませぬ。)

(さあ、それではご案内申しませう、どれ、ちようど私も米を磨ぎに参ります。) と件の桶を小脇に抱えて、縁側から、藁草履を穿いて出たが、屈んで板縁の下を覗いて、引出したの  
 は一足の古下駄で、かちりと合して埃を払いて揃えてくれた。

(お穿きなさいまし、草鞋はここにお置きなすつて、)  
 私わしは手をあげて、一礼して、

(恐入ります、これはどうも、)

(お泊め申すとなりましたら、あの、他生の縁とやらでござんす、あなたご遠慮を遊ばしますなよ。)  
 (まず恐しく調子がいいじやて。)

## 十二

「(さあ、私に跟ついてこちらへ、)と件の米磨桶こめとぎおけを引抱ひっかかえて  
手拭てぬぐいを細い帯はきに挟はさんで立つた。

髪ふっさは房ふっさりとするのを束たばねてな、櫛くしをはさんで簪かんざしで留とめている、  
その姿よの佳よさというてはなかつた。

私わしも手早く草鞋わらじを解といたから、早速古下駄こげだを頂ちようだい戴だいして、縁えん  
から立つ時ときちよいと見ると、それ例れいの白痴ばかど殿どのじゃ。

同じく私わしが方かたをじろりと見たみつけよ、舌した不足たらずが饒舌しゃべるような、  
愚ぐにもつかぬ声こゑを出だして、

(姉や、こえ、こえ。) といいいながら気がだるそうに手を持上げてその蓬々と生えた天窓を撫でた。

(坊さま、坊さま?)

すると婦人が、下ぶくれな顔にえくぼを刻んで、三ツばかりはきはきと続けて頷いた。

少年はうむといったが、ぐたりとしてまた臍をくりくりくり。

私は余り気の毒さに顔も上げられないでそつと盗むようにして見ると、婦人は何事も別に気に懸けてはおらぬ様子、そのまま後へ跟いて出ようとする時、紫陽花の花の蔭からぬいと出た一名の親仁がある。

背戸から廻って来たらしい、草鞋を穿いたなりで、胴乱の根

付つけを紐ひも長ながにぶらりと提さげ、銜くわ煙えぎ管せるをしながら並ならんで立たち停どまつた。

(おしょう)

おんな  
婦人はそなたを振向いて、

(おじ様どうぞごんした。)

(さればさの、頓とん馬まで間の抜けたというのはあのことかい。根ツから早きや狐つねでなければ乗せ得えそうにもない奴やつじやが、そこはおらが口くちじや、うまく仲な人こうどして、一ふ月たつきや三み月つきはお嬢じょう様さまがご不自由ふじゆうのねえように、翌あ日すはものにしてうんとここへ担かぎつ込みます。

(お頼み申しますよ。)

(承知、承知、おお、嬢様どこさ行かつしやる。)

(崖の水までちよいと。)

(若い坊様連れて川へ落つこちさつしやるな、おらここに眼張つて待つとるに、)と横よこぎま様に縁にのさり。

(貴僧あなた、あんなことを申しますよ。)

(と顔を見て微笑ほほえんだ。)

(一人で参りましょう、)と傍わきへ退くと、親仁おやしはくつくつと笑つて、

(はははは、さあ、早くいつてござらつせえ。)

(おじ様、今日はお前、珍めづらしいお客がお二方ござんした、こういう時はあとからまた見えようも知れませんが、次郎さんばかりでは来た者が弱んなさろう、私わたしが帰るまでそこに休んでいておくれで

ないか。)

(いいもの。)といいかけて、親仁は少年の傍へにじり寄つて、鉄挺を見たような拳で、背中をどんとくらわした、白痴の腹はだぶりとして、ベそをかくような口つきで、にやりと笑う。

私はぞつとして面を背けたが、婦人は何気ない体であつた。

親仁は大口を開いて、

(留守におらがこの亭主を盗むぞよ。)

(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りませうか。)  
背後から親仁が見るように思ったが、導かるるままに壁につい

て、かの紫陽花のある方ではない。

やがて背戸と思う処で左に馬小屋を見た、ことごとくという音は



羽目はめを蹴けるのであろう、もうその辺から薄暗くなつて来る。

(貴僧あなた、ここから下りるのでございます、迂すべりはいたしませぬが、道ひどが酷ひどうございますからお静しずかに、) という。「

### 十三

「そこから下りるのだと思われる、松の木の細くツて度外れに背の高い、ひよろひよろしたおよそ五六間上までは小枝一ツもないのがある。その中を潜くぐったが、仰あおぐと梢こずえに出て白い、月の形はここでも別にかわりは無かつた、浮世うきよはどこにあるか十三夜で。

先へ立つた婦人おんなの姿が目さきを放れたから、松の幹みきに掴つかまって

のぞ  
覗くと、つい下に居た。

あおむ  
仰向いて、

(急に低くなりますから気をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたか、宜しくば草履とお取交え申しましょう。)

たちおく  
立後れたのを歩行悩んだと察した様子、何がさて転げ落ちても早く行つて蛭の垢を落したさ。

はだし  
(何、いけませんければ跣足になります分のこと、どうぞお構いなく、嬢様にご心配をかけては済みません。)

(あれ、嬢様ですつて、)とやや調子を高めて、艶麗に笑つた。  
(はい、ただいまあの爺様が、さよう申しましたように存じま

すが、夫人おくさまでございますか。）

（何にしても貴僧あなたには叔母おばさんくらいな年紀としですよ。まあ、お早  
くいらつしやい、草履もようござんすけれど、刺とげがささりますと  
いけません、それにじくじく湿ぬれていてお気味が悪うございまし  
ようから。）と向う向むきでいいながら衣服きものの片褌かたつまをぐいとあげた。  
真白ましろなのが暗やみまぎれ、歩ある行くと霜しもが消えて行くような。

ずんずんずんと道を下りる、傍かたわらの叢くさむらから、のさのさと出  
たのは墓ひきで。

（あれ、気味が悪いよ。）というおんなと婦人うしろは背後へ高々と踵かかとを上げ  
て向うへ飛んだ。

（お客様がいらつしやるではないかね、人の足になんか搦からまって、

贅ぜいたく沢じやあないか、お前達は虫を吸っていればたくさんだよ。

貴僧あなたずんずんいらつしやいましな、どうもしはしません。こう

云う処ですからあんなものまで人懐なつかしゆうございます、厭いやじやな

いかね、お前達と友達をみたようはずかで愧しい、あれいけませんよ。）

墓はのさのさとまた草を分けて入った、婦人おんなはむこうへずいと。

（さあこの上へ乗るんです、土が柔かくで壊えますから地面は歩ある行

かれません。）

いかにも大木の僵たおれたのが草がくれにその幹をあらわしている、

乗ると足駄穿あしだばきで差支さしつかえがない、丸木だけでもおそろしく太

いので、もつともこれを渡り果ながれてるとたちまち流の音が耳げきに激し

た、それまでにはよほどの間あいだ。

仰いで見ると松の樹きはもう影も見えない、十三夜の月はずっと低うなつたが、今下りた山の頂いただきに半ばかかつて、手が届きそうにあざやかだけれども、高さはおよそ計り知られぬ。

(貴僧あなた、こちらへ。)

といった婦人おんなはもう一息、目の下に立つて待っていた。

そこは早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかかつてここによどみを作っている、川幅は一間けんばかり、水に臨のぞめば音はさまでにもないが、美しさは玉を解いて流したよう、かえつて遠くの方で凄すさましく岩に砕くだける響ひびきがする。

向う岸はまた一座の山の裾すそで、頂の方は真暗まっくらだが、山の端はからその山腹を射る月の光に照し出された辺あたりからは大石小石、榮螺さざえ

のようなの、六尺角に切出したの、劍つるぎのようなのやら、鞠まりの形をしたのやら、目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水にひたつたのはただ小山のよう。」

## 十四

「(いい塩梅あんばいに今日は水がふえておりますから、中へ入りませんでもこの上でようございます。)と甲ひたを浸して爪つまさき先かを屈かめながら、雪のような素足で石の盤ばんの上に立っていた。

自分達が立った側かわは、かえつてこっちの山の裾が水に迫つて、ちようど切穴の形になつて、そこへこの石を嵌はめたような詔あつらえ。川

上も下流も見えぬが、向うのあの岩山、つづらおり九十九折のような形、流は五尺、三尺、一間ばかりずつ上流の方がだんだん遠く、飛とび々とびに岩をかがったように隠見いんけんして、いずれも月光を浴びた、銀のよろい鎧の姿、目まのあたり近いのはゆるぎ糸を捌さばくがごとく真白ひるがえに翻つつて。

(結構な流れでございませぬ。)

(はい、この水は源たきが滝でございませぬ、この山を旅するお方は皆みな大風のような音をどこかで聞きます。貴僧あなたはこちらへいらつしやる道でお心着きはなさいませぬかい。)

さればこそ山やま蛭むしの大藪おおやぶへ入ろうという少し前からその音を。

(あれは林へ風の当るものではございませぬので?)

(いえ、誰でもそう申します、あの森から三里ばかり傍道へ入りました処に大滝があるのでございます、それはそれは日本一だそうですが、路が嶮しゆうござんすので、十人に一人参つたものはございませぬ。その滝が荒れましたと申しまして、ちようど今から十三年前、恐しい洪水がございました、こんな高い処まで川の底になりましたね、麓の村も山も家も残らず流れてしまいました。この上の洞も、はじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、この流れもその時から出来ました、ご覧なさいましな、この通り皆な石が流れたのでございますよ。)

婦人はいつかもう米を精げ果てて、衣紋の乱れた、乳の端もほの見える、膨らかな胸を反して立った、鼻高く口を結んで目を恍



つとり  
惚と上を向いて頂を仰いだが、月はなお半腹のその累々たる  
巖いわおを照すばかり。

(今でもこうやって見ますと恐いようでございませう。)と屈んで  
二の腕うでの処を洗っている。

(あれ、貴僧あなた、そんな行儀ぎようぎのいいことをしていらしつてはお召めし  
が濡ぬれます、気味が悪うございませうよ、すつぱり裸体はだかになつてお  
洗いなさいまし、私が流して上げましょう。)

(いえ、)

(いえじやあござんせぬ、それ、それ、お法衣ころもの袖そでが浸ひたるではあ  
りませんか、)という突いきなり然うしろ背後から帯に手をかけて、身悶みもだえ  
をして縮むのを、邪慳じゃけんらしくすつぱり脱ぬいで取つた。

私は師匠が厳しかつたし、経を読む身体じや、肌さえ脱いだことはついぞ覚えぬ。しかも婦人の前、蝸牛が城を明け渡したようで、口を利くさえ、まして手足のあがきも出来ず、背中を円くして、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を傍らの枝へふわりとかけた。

（お召はこうやっておきましょう、さあお背を、あれさ、じつとして。お嬢様とおっしゃって下さいましたお札に、叔母さんが世話を焼くのでござんす、お人の悪い。）と、いつて片袖を前歯で引上げ、玉のような二の腕をあからさまに背中に乗せたが、じつと見て、

（まあ、）

(どうかいたしておりますか。)

(痣あざのようになって、一面に。)

(ええ、それでございます、酷ひどい目に逢あいました。)

思い出してもぞつとするて。」

## 十五

「婦人おんなは驚いた顔をして、

(それでは森の中で、大変でございますこと。旅をする人が、飛ひ騮だの山では蛭が降るといふのはあすこでござんす。貴僧あなたは拔道を  
ご存じないから正面まともに蛭の巣をお通りなさいましたのでございま

すよ。お生命いのちも冥みよう加がなくらい、馬でも牛でも吸い殺すのでござ  
いますもの。しかし疼うずくようにお痒かゆいのでござんしようね。）

（ただいまではもう痛みますばかりになりました。）

（それではこんなものでこすりましては柔やわらかいお肌すくもが擦剥すりむけまし  
よう。）というとな手が綿わたのように障さわった。

それから両方の肩から、背、横腹いしき、臀ししき、さらさら水をかけては  
さすつてくれる。

それがさ、骨に通つて冷たいかというとなかなかた。暑  
い時分じやが、理窟りくつをいうところではあるまい、私わしの血ちが沸わいた  
せいか、婦人おんなの温気ぬくみか、手で洗つてくれる水みづがいい工合ぐあいに身に染  
みる、もつとも質たちの佳いい水は柔かじやそうな。

その心地こころちの得えもいわれなさで、眠気ねむけがさしたでもあるまいが、うとうとする様子で、疵きずの痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひたと附くっついてゐる婦人おんなの身体で、私わしは花びらの中へ包まれたような工合くわい。

山家やまがの者ものには肖合にあわぬ、都みやこにも希まれな器量きりやうはいうに及およばぬが弱々しそうな風采ふうさいじゃ、背中を流ながす中うちにもはツはツと内証ないしよで呼吸いきがはずむから、もう断たろう断たろうと思おもいながら、例れいの恍惚うつつりで、気はつきながら洗あらわした。

その上うしろ、山の気きか、女の香においか、ほんのりと佳かい薰おりがする、私わしは背後うしろでつく息いきじやろうと思おもつた。「

上しょうにん 人じんはちよつと句切くちつて、

「いや、お前様お手近じや、その明を掻き立ってもらいたい、暗いと怪しからぬ話じや、ここらから一番野面のづらで遣つけよう。」  
 枕まくらを並べた上人の姿も臃おぼろげに明あかりは暗くなっていた、早速とうしん燈心を明くすると、上人は微笑ほほえみながら続けたのである。

「さあ、そうやっていつの間うつつにやら現とも無しに、こう、その不思議な、結構な薰あつたかのする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸えりから次第しだいに天窓あたままで一面に被かぶつたから吃驚びっくり、石いしに尻りもち餅もちを搗ついて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思うとたんに、女の手が背後うしろから肩越しに胸をおさえたのでしっかりつかまつた。

(貴僧あなた、お傍そばに居て汗臭あせくそうはござんせぬかい、とんだ暑がりな

んでございますから、こうやっておりましてもこんなでございますよ。」という胸にある手を取ったのを、慌あわてて放して棒のように立った。

(失礼、)

(いいえ誰も見ておりはしませんよ。 )と澄すまして言う、婦人おんなもいつの間にか衣服きものを脱いで全身を練絹ねりぎぬのように露あらわしていたのじゃ。何と驚おどろくまいことか。

(こんなに太っておりますから、もうお愧はずかしいほど暑いのでございます、今時は毎日二度も三度も来てはこうやって汗を流します、この水がございせんかつたらどういたしましょう、貴僧あなた、お手て拭ぬぐい。 ) といつて絞しぼったのを寄越よこした。

（それでおみ足をお拭きなさいまし。）

いつの間にか、体はちゃんと拭いてあつた、お話し申すも恐多いが、はははははははは。」

## 十六

「なるほど見たところ、衣服を着た時の姿とは違うて肉つきの豊かな、ふつくりとした膚はだえ。」

（さつき小屋へ入って世話をしましたので、ぬらぬらした馬の鼻息が体中にかかつて気味が悪うござんす。ちようどようございますから私も体を拭きましよう。）



と姉きようだい弟うちわばなしが内端話うちわばなしをするような調子。手をあげて黒髪をお

さえながら腋わきの下を手拭てぬぐいでぐいと拭き、あとを両手で絞しぼりながら

立つた姿、ただこれ雪のようなのをかかる霊水で清めた、こうい

う女の汗は薄うすくれない紅くしになつて流れよう。

ちよいちよいと櫛くしを入れて、

(まあ、女がこんなお転婆てんぱをいたしまして、川へ落おっこちたらどう

しましよう、川下かわしもへ流れて出ましたら、村里むらの者が何といつて

見ましようね。)

(白桃しろももの花だと思ひます。)とふと心付いて何の気もなしにい

うと、顔が合うた。

すると、さも嬉うれしそうに莞爾にっこりしてその時だけは初うい々ういしゆう

とし  
年紀も七ツ八ツ若やぐばかり、きむすめ 処女の羞はじを含ふくんで下を向いた。

わし 私はそのまま目を外そらしたが、その一段の婦人おんなの姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら向う岸のしぶき ※に濡ぬれて黒い、滑なめらかな大きな石へ蒼味あおみを帯びて透すきとお通つて映るように見えた。

するとね、夜目で判はつきり然とは目に入いらなんだが地体じたい何でも洞ほらあ穴ながあるとみえる。ひらひらと、こちらからもひらひらと、ものの鳥ほどはあろうという大蝙蝠おおこうもりが目を遮さえぎつた。

(あれ、いけないよ、お客様があるじゃないかね。)  
不意を打たれたように叫んで身悶みもだえをしたのは婦人おんな。

(どうかありませんでしたか、) もうちゃんと法衣ころもを着たから氣丈きじょう夫ぶに尋たずねる。

(いいえ、)

といったばかりできまりが悪そうに、くるりと後うしろむき向むきになつた。

その時小犬ほどな鼠ねずみいろ色いろの小坊主こぼうずが、ちよこちよことやつて来て、あなやと思うと、崖がけから横よこに宙そらをひよいと、背後うしろから婦人おんなの背中へびつたり。

はだか裸体の立姿は腰から消えたようになって、抱だきついたものがある。  
ちくしょう(畜生、お客様が見えないかい。)

と声こゑに怒いかりを帯びたが、

(お前達は生意気なまいきだよ、)と激あたましくいいさま、腋わきの下から覗のぞこうとした件くだんの動物の天窗あたまを振ふりかえ返りさまにくらわしたで。

キツキツというて奇声を放った、件の小坊主はそのまま後飛うしろとびにまた宙を飛んで、今まで法衣ころもをかけておいた、枝の尖さきへ長い手つるで釣さし下がつたと思うと、くるりと釣瓶つるべ覆がえしに上へ乗つて、それなりさらさらと木登きのぼりをしたのは、何と猿さるじやあるまいか。

枝から枝を伝うと見えて、見上げるように高い木の、やがて梢こずえまで、かさかさがさり。

まばらに葉の中を透すかして月は山の端はを放れた、その梢のあたり。  
 おんなおんな婦人はものに拗すねたよう、今の悪戯いたずら、いや、毎々ひき、蟻こもと蝠りと、お猿で三度じや。

その悪戯いたに多く機嫌きげんを損そこねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様おふくろには得えてある図じや。

本当に怒り出す。

といった風情ふぜいで面倒臭めんどくさそうに衣服きものを着ていたから、私わしは何にも問わずに小さくなつて黙つて控ひかえた。」

## 十七

「優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のある、馴なれなれ々なれなれしくて犯し易やすからぬ品のいい、いかなることにもしもいざとなれば驚くに足らぬという身に応こたえのあるといったような風の婦人おんな、かく嬌きようしん 瞋しんを発してはきつといいことはあるまい、今この婦人おんなに邪慳じゃけんにされては木から落ちた猿同然じゃと、おっかなびつく

りで、おずおず控えていたが、いや案ずるより産うむが安い。

(貴僧あなた、さぞおかしかったでござんしようね、)と自分でも思い出したように快く微笑ほほえみながら、

(しようがないのでございますよ。)

以前と変わらず心安くなつた、帯も早やしめたので、

(それでは家うちへ帰りましょう。 )と米磨桶こめとぎおけを小腋こわきにして、草履ぞうりを引ひかけてつと崖がけへ上のぼつた。

(お危あぶうござんすから。)

(いえ、もうだいぶ勝手が分つております。)

ずつと心得こころえた意つもりじやつたが、さて上あがる時見ると思おもいの外ほか上あま

では大層高い。

やがてまた例の木の丸太を渡るのじやが、さつきもいった通り草のなかに横倒れになつてゐる木地がこうちようど鱗うろこのようで、  
 譬たとえにもよくいうが松の木は蝮うわばみに似てゐるで。

殊ことに崖を、上の方へ、いい塩梅あんばいに蛭うねつた様子が、とんだものに持つて来いなり、およそこのくらいな洞どうなか中の長虫がと思つと、  
 頭と尾を草に隠して、月あかりに歴ありあり然とそれ。

山路の時を思い出すと我ながら足が竦すくむ。  
 婦人おんなは深切うしろに後を氣遣きづこうては氣を付けてくれる。

(それをお渡りなさいます時、下を見てはなりません。ちようどちゆうとでよッぽど谷が深いのでございますから、目が廻まうと悪うござんす。)

(はい。)

愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ず</sup>愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ず</sup>してはいられぬから、我<sup>わ</sup>身<sup>が</sup>を笑<sup>わ</sup>いつけて、ま<sup>ま</sup>ず乗<sup>の</sup>つた。  
引<sup>ひ</sup>かかるよう、刻<sup>き</sup>が<sup>ぎ</sup>入<sup>い</sup>れてあるのじやから、気<sup>き</sup>さ<sup>さ</sup>え確<sup>た</sup>か<sup>か</sup>なら足<sup>あ</sup>駄<sup>だ</sup>で  
も歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>かれる。

それがさ、一<sup>い</sup>件<sup>けん</sup>じやから耐<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>らぬて、乗<sup>の</sup>るとこ<sup>う</sup>ぐら<sup>う</sup>ぐら<sup>う</sup>して柔<sup>じ</sup>  
かに<sup>ず</sup>る<sup>ず</sup>ると這<sup>は</sup>い<sup>い</sup>そう<sup>じ</sup>や<sup>か</sup>ら、わ<sup>わ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>と引<sup>ひ</sup>跨<sup>また</sup>いで腰<sup>こし</sup>を  
ど<sup>ど</sup>さり。

(あ<sup>あ</sup>、意<sup>い</sup>気<sup>き</sup>地<sup>ぢ</sup>は<sup>は</sup>ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>ね<sup>え</sup>。足<sup>あ</sup>駄<sup>だ</sup>で<sup>は</sup>無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>で<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し  
よう、こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>お</sup>穿<sup>は</sup>き<sup>か</sup>換<sup>か</sup>え<sup>え</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し、あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>さ<sup>さ</sup>、ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>  
を<sup>を</sup>肯<sup>き</sup>く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>す<sup>す</sup>よ。)

私<sup>わ</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>つ<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>何<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>の</sup>婦<sup>お</sup>人<sup>んな</sup>に<sup>に</sup>畏<sup>い</sup>敬<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>念<sup>ねん</sup>が<sup>が</sup>生<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>て<sup>て</sup>善<sup>ぜん</sup>



か悪か、どの道命令されるように心得たから、いわるるままに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人おんなは足駄を穿きながら手を取ってくれます。

たちまち身が軽くなつたように覚えて、訳わけなく後うしろに従つて、ひよいとあの孤家ひとつやの背戸せどの端はたへ出た。

であいがしら出会頭であいがしらに声を懸かけたものがある。

（やあ、大分手間が取れると思つたに、ご坊ぼうさまもと様旧の体で帰らつしやつたの。）

（何をいうんだね、小父様家おじさんうちの番はどうおしだ。）

（もういい時分じゃ、また私も余わしあんまり遅おそうなつては道が困るで、そ

ろそろ青を引出して支度したくしておこうと思うてよ。」

（それはお待ち遠まちどおでござんした。）

（何なにさ、行いつてみさつしやいご亭ていしゆ主しゆは無事じや、いやなかなかわし  
私わしが手てには口説落くどきされなんだ、ははははは。）と意味もないこと  
を大おお笑わらいして、親仁おやしうまやは厩うまやの方かたへてくてくへ行いつた。

白痴ばかはおなじ処ところになお形かたちを存ぞんじている、海月くらげも日ひにあたらねば  
解とけぬとみえる。」

## 十八

「ヒイイン！ しつ、どうどうどうと背戸まわを廻まわる鱮爪ひづめの音ねが縁えんへ

響ひびいて親おやじ仁は一頭の馬を門前へ引き出した。

轡くつわづら頭を取つて立ちはだかり、

(嬢様そんならこのままで私わし参りやる、はい、ご坊ぼうさま様にたくさんご馳走ちそうして上げなされ。)

おんなおんな 婦人は炉縁ろぶちに行燈あんどうを引附ひきつけ、俯向うつむいて鍋なべの下を燻いぶしていたが、  
振ふり仰あおぎ、鉄てつの火箸ひばしを持もつた手を膝ひざに置いて、

(ご苦労でござんす。)

(いんえご懇ねんごろには及びましねえ。しつ!)と荒繩あらかなわの綱つなを引く。  
青あしげで蘆毛はだかうま、裸はだかうま馬たぐまで逞たくましいが、鬣たてがみの薄うすい牡おすじゃわい。

その馬がさ、私も別に馬は珍しゆうもないが、白痴ばかど殿のの背うしろ後に  
畏かしこまつて手持もちぶさ不沙汰たじゃから今引いて行こうとする時縁側へひらり

と出て、

(その馬はどこへ。)

(おお、諏訪すわの湖の辺あたりまで馬市へ出しやすのじや、これから明朝あした

お坊様が歩行あるかつしやる山路を越えて行きやす。)

(もし、それへ乗って今からお遁にげ遊ばすお意つもりではないかい。)

婦人おんなは慌あわだしく遮たつて声を懸かけた。

(いえ、もつたいない、修しゆぎ行ぎようの身が馬で足休あしやすめをしましょう

なぞとは存ぞんじませぬ。)

(何でも人間を乗のつけられそうな馬じゃあござらぬ。お坊様は命

拾ひろいをなされたのじやで、大人おとなしゆうして嬢ぢやう様の袖そでの中で、今夜

は助たすけて貰もらわつしやい。さようならちよつくら行いつて参まゐりますよ

。

(あい。)

(畜生。)<sup>ちくしやう</sup> といったが馬は出ないわ。びくびくと蠢<sup>うごめ</sup>いて見える大<sup>おおき</sup>な鼻<sup>はな</sup> 面<sup>つら</sup>をこちらへ捻<sup>ね</sup>じ向けてしきりに私等<sup>わしら</sup>が居る方を見る様子。

(どうどうどう、畜生これあだけた獣<sup>けもの</sup>じゃ、やい！)

右左にして綱を引張ったが、脚<sup>あし</sup>から根をつけたごとくにぬつくと立っ<sup>た</sup>ていてびくともせぬ。

親仁<sup>おやし</sup>大いに苛<sup>いらだ</sup>立<sup>た</sup>つて、叩<sup>たた</sup>いたり、打<sup>ぶ</sup>つたり、馬の胴体<sup>たうたい</sup>について二三度ぐるぐると廻<sup>ま</sup>ったが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるよう<sup>よう</sup>にして横<sup>よこ</sup>腹<sup>はら</sup>へ体<sup>たい</sup>をあてた時、ようよう前足を上げたばかりまた

よつあし つツば  
四脚を突張り抜く。

(嬢様嬢様。)

と親仁おやし わめが喚くと、婦人おんなはちよつと立つて白い爪つまさきをちよろちよろと真ま黒くろに煤すすけた太い柱たてを楯たてに取つて、馬の目の届かぬほどに小隠れた。

その内腰はぎに挟はさんだ、煮染にしめたような、なえなえの手てぬぐい拭ぬぐを抜いて克明こくめいに刻きんだ額の皺しわの汗あせを拭ふいて、親仁おやしはこれでよしというきくみ氣組きくみ、再び前へ廻まわつたが、旧もとによつて貧乏びんぼう動ゆるぎもしないので、綱つなに両手をかけて足を揃そろえて反そりかえ返かえるようにして、うむと総身そうみに力ちからを入れた。とたんにどうじやい。

すさますさまいなないななななかぞらひるがえひるがえ  
凄すさまじく嘶いなないて前足を両方中空なかぞらへ翻ひるがえしたから、小さな親仁おやしは仰おやし

向けに引くりかえつた、ずんどう、月夜に砂煙がぱつと立つ。  
 白痴ばかにもこれは可笑おかしかったろう、この時ばかりじや、真直まっすぐ  
 に首を据すえて厚い唇くちびるをばくりと開けた、大粒おおつぶな歯むきだを露出して、  
 あの宙へ下げている手を風で煽あおるように、はらりはらり。

(世話が焼けることねえ、)

婦人おんなは投げるようにいつて草履ぞうりを突つかけて土間へついと出る。

(嬢様かんちが勘違かんちがいさつしやるな、これはお前様ではないぞ、何でも  
 はじめからそこなお坊様に目をつけたつけよ、畜生ぞくえん俗縁ぞくえんがある  
 だッぺいわさ。)

俗縁おどろは驚おどろきたい。

すると婦人が、

（あなた  
貴僧ここへいらつしやる路で誰にかお逢いなさりはしませんか  
）  
「」

## 十九

「（はい、辻の手前で富山の反魂丹売に逢いましたが、一足先にやつぱりこの路へ入りました。）

（ああ、そう。）と会心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、およそ耐らなく可笑しいといったはしたない風采で。

極めて与し易う見えたので、

（もしや此家へ参りませなんだでございませうか。）



(いいえ、存じません。) という時たちまち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を払うている馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

(しようがないねえ、) といいいながら、かなぐるようにして、その細帯を解きかけた、片端が土へ引こうとするのを、掻取つてちよいと猶予う。

(ああ、ああ。) と濁つた声を出して白痴が件のひよろりとした手を差向けたので、婦人は解いたのを渡してやると、風呂敷を寛げたような、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて宝物を守護するようじや。

婦人は衣紋を抱き合せ、乳の下でおさえながら静に土間を出て

馬の傍へつと寄つた。

私はただ呆氣に取られて見ていると、爪立をして伸び上り、手をしなやかに空ぎまにして、二三度鬣を撫でたが。

大きな鼻頭の正面にすつくりと立つた。丈もすらすらと急に高くなつたように見えた、婦人は目を据え、口を結び、眉を開いて恍惚となつた有様、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風はとみに失せて、神か、魔かと思われる。

その時裏の山、向うの峰、左右前後にすくすくとあるのが、一ツツ嘴を向け、頭を擡げて、この一落の別天地、親仁を下手に控え、馬に面してゐんだ月下の美女の姿を差覗くがごとく、陰々として深山の気が籠つて来た。

生ぬるい風のような氣勢けはいがすると思うと、左の肩から片膚かたはだを  
 脱はずいだが、右の手を脱はずして、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで  
 着はいていたその単衣ひとえを円まるけて持ち、霞かすみも絡まとわぬ姿になつた。  
 馬せなは背、腹の皮を弛ゆるめて汗もしとどに流れんばかり、突張つっぱつた  
 脚あしもなよなよとして身震みふるをしたが、鼻面はなづらを地につけて一掴ひとつかみ  
 の白泡しろあわを吹出ふきだしたと思うと前足を折ろうとする。

その時、頤あぎとの下へ手をかけて、片手で持っていた単衣をふわり  
 と投なげて馬の目を蔽おほうが否うや、兎うさぎは躍おどつて、仰向あおもむけざまに身ひるがえを翻  
 し、妖氣ようきを籠こめて朦朧もうろうとした月あかりに、前足の間に膚はだが挟はさま  
 たと思うと、衣きぬを脱きぬして搔取かいとりながら下腹をつと潜くぐつて横に抜け  
 て出た。

親仁は羞心得たものと見える、この機かけに手綱を引いたから、馬はすたすたと健脚を山路に上げた、しやん、しやん、しやん、しやんしやん、しやんしやん、——見る間に眼界を遠ざかる。

婦人は早や衣服を引かけて縁側へ入つて来て、突然帯を取ろうとすると、白痴は惜しそうに押えて放さず、手を上げて、婦人の胸を圧えようとした。

邪慳に払い退けて、きつと睨んで見せると、そのままがつくりと頭を垂れた、すべての光景は行燈の火も幽に幻のように見えるが、炬にくべた柴がひらひらと炎先を立てたので、婦人はつと走つて入る。空の月のうらを行くと思ふあたり遙に馬子歌が聞え

たて。」

## 二十

「さて、それからご飯の時じや、膳ぜんには山家やまがの香かうの物、生姜はじかみの漬つけたのと、わかめを茹うでたの、塩漬しおの名も知らぬ蕈きのこの味噌汁みそじる、いやなかなか人参にんじんと干瓢かんぴょうどころではござらぬ。

品物しなぶつは侘わびしいが、なかなかのお手料理てしやうり、餓うえてはいるし、冥みよう加が至し極ごくなお給仕きよし、盆ぼんを膝ひざに構かまえてその上うへに肱ひじをついて、頬ほを支さえながら、嬉うれしそうに見ていたわ。

縁側えんがわに居ゐた白痴ばかは誰たれも取とり合あわぬ徒然つれづれに堪たえられなくなつたも

のか、ぐたぐたと膝行出して、婦人の傍へその便々たる腹を持つて来たが、崩れたように胡坐して、しきりにこう我が膳を視めて、指をした。

(うううう、うううう。)

(何でございますね、あとでお食んなさい、お客様じゃありませんか。)

白痴は情ない顔をして口を曲めながら頭を掉つた。

(厭？ しょうがありませんね、それじゃご一所に召しあがれ。あなた 貴僧、ご免を蒙りますよ。)

私は思わず箸を置いて、

(さあどうぞお構いなく、とんだご雑作を頂きます。)

(いえ、何の貴僧あなた。お前さん後ほどに私と一所にお食べなさればいいのに。困った人でございますよ。)とそらさぬ愛想あいそ、手早くおなじような膳を拵こしらえてならべて出した。

飯のつけようも効かいがよい女房にようぼうぶり、しかも何となく奥おく床かしい、上品な、高家こうけの風がある。

白痴あほうはどんよりした目をあげて膳の上を睨ねめていたが、

(あれを、ああ、ああ、あれ。)といつてきよろきよると四辺あたりをみまわす。

婦人おんなはじつと瞻みまつて、

(まあ、いいじゃないか。そんなものはいつでも食られます、今夜はお客様がありますよ。)

(うむ、いや、いや。)と肩腹を揺つたが、ベそを搔いて泣出しそう。

おんなは困じ果てたらしい、傍のものの気の毒さ。

(嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたがよいではござりませんか。私にお氣遣はかえつて心苦しゅうござりませぬ。)と慇懃にいうた。

おんなはまたもう一度、

(厭かい、これでは悪いのかい。)

白痴が泣出しそうにすると、さも怨めしげに流眊に見ながら、こわれこわれになつた戸棚の中から、鉢に入つたのを取り出して手早く白痴の膳につけた。



(はい。)と故わざとらしく、すねたようにいつて笑顔えがお造づくり。

はてさて迷惑めいわくな、こりや目の前で黄色あおだいしよう蛇うまにの旨煮うまにか、腹はらご

籠もりの猿むしの蒸焼むしやきか、災難あかが軽かうても、赤あかがえる蛙わの干物ひものを大口はらごに

しゃぶるであろうと、そつと見ていると、片手ひたに腕わんを持ちながら

掴つかみだしたのは老沢庵ひねたくあん。

それもさ、刻きんだのではないで、一本三ツ切いっぴんさんくにしたろうという

握にぎりぶと太よこぐわなのを横よこぐわ銜くわえにしてやらかすのじゃ。

婦人おんなはよくよくあしらいかねたか、盗ぬすむように私わしを見てきつと

顔あかを赭あからめて初心あはれらしい、そんな質たちではあるまいに、羞はづかしげに

膝ひざなる手て拭ぬぐいの端はしを口くちにあてた。

なるほどこの少年せうねんはこれであろう、身体からだは沢庵色たくあんいろにふとつてい

る。やがてわけもなく飢食えじきを平たいらげて湯ともいわず、ふツふツと大儀たいぎそうに呼吸いきを向うへ吐つくわさ。

(何でございますか、私は胸つかに支つかえましたようで、ちつとも欲しくございませぬから、また後のちほどに頂いただききましょう、)

と婦人おんな自分は箸も取らずに二ツの膳を片づけてな。」

## 二十一

「しばらくしよんぼりしていたつけ。

(貴僧あなた、さぞお疲労つかれ、すぐにお休ませ申しましょうか。)

(難ありがと有ありう存じます、まだちつとも眠くはござりませぬ、さつき

体を洗いましたので草臥くたびれもすっかり復なおりました。

（あの流れはどんな病にでもよく利きます、私が苦勞わたしをいたしまして骨と皮ばかりに体が朽かれましても、半日あすこにつかつておりますと、水々しくなるのでございますよ。もつともあのこれから冬になりましたして山がまるで氷つてしまい、川も岨がけも残らず雪になりまして、貴僧あなたが行水を遊ばしたあすこばかりは水が隠かくれません、そうしていきりが立ちます。

てつぼうきず  
鉄砲疵てつぱうきずのございます猿だの、貴僧あなた、足を折つた五位ごい鷲さぎ、種いろいろ  
ろ  
々なものが浴ゆあみに参りますからその足跡あしあとで岨がけの路が出来ます  
くらい、きつとそれが利いたのでございましょう。

そんなにございませんければこうやってお話をなすつて下さい

まし、寂しくさびつてなりません、本当ほんとにお愧はずかしゆうございませが、  
 こんな山の中に引籠ひっこもつておりますと、ものをいうことも忘れま  
 したようで、心細いのでございませよ。

貴僧あなた、それでもお眠ければご遠慮えんりよなさいませなえ。別にお寢ね  
 室まと申してもございませんがその代り蚊かは一ツも居ませんよ、町ま  
 方ちかたではね、上かみの洞ほらの者は、里へ泊りに来た時蚊帳かやを釣つつて寝か  
 そうとすると、どうして入るのか解らないので、梯子はしごを貸せいと  
 喚わめいたと申して甕なぶるのでございませ。

たんと朝寐あさねを遊ばしても鐘かねは聞えず、鶏とりも鳴きません、犬だつ  
 ておりませんからお心こころやす安やすうござんしよう。

この人も生れ落ちるとこの山で育つたので、何にも存じません

代り、気のいい人でちつともお心こころ置おきはないのでござんす。

それでも風俗ふうそうのかわつた方がいらつしやいますと、大事にして  
お辞儀じぎをすることだけは知つてでございますが、まだご挨拶あいさつを  
いたしませんね。この頃ごろは体がだるいと見えてお惰なまけさんになん  
なすつたよ。いいえ、まるで愚おろかなのではございませぬ、何でもち  
やんと心こころ得えております。

さあ、ご坊様にご挨拶をなすつて下さい。まあ、お辞儀をお忘  
れかい。)と親しげに身を寄せて、顔を差し覗のぞいて、いそいそし  
ていうと、白痴ばかはふらふらと両手をついて、ぜんまいが切れたよ  
うにがつくり一礼。

(はい、)といつて私わしも何か胸せまが迫つつて頭むりを下げた。

そのままその俯向いた拍子に筋が抜けたらしい、横に流れようとするのを、婦人は優しゆう扶け起して、

(おお、よくしたねえ。)

天晴あつぱれといいたそうな顔色かおつきで、

(貴僧あなた、申せば何でも出来ましようと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者の手でもあの水でも復なりませなんだ、両足が立ちませんのでございますから、何を覚えさしましても役には立ちません。それにご覧なさいまし、お辞儀一ツいたしますさえ、あの通り大儀たいぎらしい。

ものを教えますと覚えますのにさぞ骨が折れて切せつのうござんしよう、体を苦しませるだけだと存じて何にもさせないで置きます

から、だんだん、手を動かす働も、ものをいうことも忘れま  
 した。それでもあの、謡うたが唄うたえますわ。二ツ三ツ今でも知  
 っておりますよ。さあお客様に一ツお聞かせなさいましなね。  
 白痴ばかは婦人おんなを見て、また私わたしが顔をじろじろ見て、人見知ひとみしりを  
 するといった形で首を振った。」

## 二十二

「左右とこして、婦人おんなが、励はげますように、賺すかすようにして勧めると、  
 白痴ばかは首を曲げてかの臍へそを弄もてあそびながら唄うたった。

木曾きその御嶽山おんたけさんは夏でも寒い、

あわ若  
 拾遣りたや足袋添えて。

(よく知っておりましょう、)と婦人は聞き澄して莞爾する。

不思議や、唄った時の白痴の声はこの話をお聞きなさるお前様  
 はもとよりじやが、私も推量したとは月鼈雲泥、天地の相違、  
 節廻し、あげさげ、呼吸の続くところから、第一その清らかな  
 涼しい声という者は、到底この少年の咽喉から出たものではな  
 い。まず前の世のこの白痴の身が、冥土から管でそのふくれた腹  
 へ通わして寄越すほどに聞えましたよ。

私は畏つて聞き果てると、膝に手をついたツきりどうしても顔  
 を上げてそこの男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤして、  
 はらはらと落涙した。



おんな  
婦人は目早く見つけたそうで、

(おや、貴僧あなた、どうかなさいましたか。)

急にもものもいわれなんだが漸々ようよう、

(はい、なあに、変ったことでもござりませぬ、私わしも嬢様のごことは別にお尋ねたず申しませんから、貴女あなたも何にも問うては下さりませぬ。)

と仔細しさいは語らずただ思い入ってそう言うたが、実は以前から様子でも知れる、金釵きんさぎ玉簪よくさんをかざし、蝶衣ちやういを纏まとうて、珠履しゆりを穿うがたば、正まさに驪山りさんに入いって、相抱あいいだくべき豊肥ほうひ妖艶ようえんの人が、その男おとこに対する取廻しの優しき、隔へだてなき、深切しんせつさに、人事ひとごとながら嬉うれしくて、思おもわず涙なみだが流れたのじや。

すると人の腹の中を読みかねるような婦人おんなではない、たちまち様子を悟さとったかして、

(貴僧あなたはほんとうにお優しい。)といつて、得えも謂いわれぬ色を目たたに湛たえて、じつと見た。私わしも首こうべを低たれた、むこうでも差さ俯う向むく。いや、行燈あんどうがまた薄暗うすくなつて参まつたようじやが、恐おそらくこりや白痴ばかのせいじやて。

その時よ。

座ざが白しろけて、しばらく言葉ことばが途絶とだえたうちに所在しぜんがないので、唄うたうたいの太夫たゆう、退たい屈くつをしたとみえて、顔かほの前の行燈あんどうを吸すい込こむような大欠伸おおあくびをしたから。

身動きみうごきをしてな、

(寝ようちやあ、寝ようちやあ、)とよたよた体を持もちあつか扱あつかうわ  
い。

(眠うなつたのかい、もうお寝か。)といったが坐すわり直つてふと  
気がついたように四辺あたりみまわをおもてした。戸外はあたかも真昼のよう、月  
の光は開あけ拈ひろげた家の内やうちへはらはらとさして、紫陽花あじさいの色も鮮あざや  
麗かに蒼あおかつた。

(貴僧あなたももうお休みなさいますか。)

(はい、ご厄やっかい介やどにあいなります。)

(まあ、いま宿やどを寝かします、おゆつくりなさいましな。戸外おもてへ  
は近うござんすが、夏は広い方が結句けつこ宜ようございましょう、私わたしど  
もは納戸なんどへ臥ふせりますから、貴僧あなたはここへお広くお寛くつろぎがようご)

ざんす、ちよいと待つて。」といいかけてつツと立ち、つかつかと足早に土間へ下りた、余り身のこなしが活漥かっぱつであつたので、その拍子に黒髪が先を巻いたまま項うなじへ崩くずれた。

鬢びんをおさえて戸につかまつて、戸外おもてを透すかしたが、独ひとりごと言ことをし  
た。

(おやおやさつきの騒さわぎで櫛くしを落したそいな。)

いかさま馬の腹を潜くぐつた時じや。」

## 二十三

この折から下の廊下ろうかに登あしおと音がして、静しずかに大跨おおまたに歩ある行いたの

が、寂せきとしてゐるからよく。

やがて小用こようを達たした様子、雨戸をばたりと開けるのが聞えた、手水鉢ちようずばちへ柄杓ひしやくの響ひびき。

「おお、積つもつた、積つもつた。」と呟つぶやいたのは、旅籠屋はたごやの亭主ていしゅの声である。

「ほほう、この若狭わかさの商人あきんどはどこかへ泊とつたと見える、何か愉おもしろい夢でも見ているかな。」

「どうぞその後を、それから。」と聞く身には他事をいううちが牴牾もどかしく、膠にべもなく続きを促うながした。

「さて、夜も更ふけました、」といつて旅僧たびそうはまた語かたり出した。

「たいてい推量すいりやうもなさるであろうが、いかに草臥くたびれておつても申

上げたような深山みやまの孤家ひとつやで、眠られるものではない、それに少し気になつて、はじめの内私わしを寝かさなかつた事もあるし、目は冴さえて、まじまじしていたが、さすがに、疲つかが酷ひどいから、心しんは少しぼんやりして来た、何しろ夜の白むのが待まち遠とほでならぬ。

そこではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼みにして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり経たつたものをと、怪あやしんだが、やがて気が付いて、こういう処じや山寺どころではないと思うと、にわかにな細こくなつた。

その時は早や、夜がものに譬たとえると谷の底じや、白痴ばかがだらしない寐息ねいきも聞えなくなると、たちまち戸の外にももの気勢けはいがしてきた。

獣けものの登音のようで、さまで遠くの方から歩あ行るいて来たのではな  
 いよう、猿も、蟻ひきも、居る処と、気休めにまず考えたが、なかな  
 かどうして。

しばらくすると今そやつが正面の戸ちかづに近いなと思つたのが、  
 羊の鳴声になる。

私はその方を枕まくらにしていたのじゃから、つまり枕まくら頭もとの戸外おもて  
 じゃな。しばらくすると、右手めでのかの紫陽花が咲いていたその花  
 の下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むささびか知らぬがきツきツといつて屋むねの棟むねへ、やがておよそ  
 小山ほどあろうと気取けどられるのが胸おをおすほどちかづに近ちかづいて来て、牛  
 が鳴いた、遠くかなたの彼方かなたからひたひたと小刻こきざみに駈かけて来るのは、

二本足に草鞋わらじを穿はいた獣と思われた、いやさまざまにむらむらと家うちのぐるりを取巻いたようで、二十三十のものの鼻息、羽音、中には囁ささやいているのがある。あたかも何よ、それ畜生道ちくしやうどうの地獄の絵を、月夜に映したような怪しの姿が板戸一枚、魑魅魍魎ちみもうりやうというのであろうか、ざわざわと木の葉が戦そよぐ気色けしきだった。

息を凝こらすと、納戸で、

（うむ、）といって長く呼吸いきを引いて一ひと声こえ、魘うなれたのは婦人おんなじや。

（今夜はお客様があるよ。）と叫んだ。

（お客様があるじゃないか。）

としばらく経って二度目のははつきりと清すずしい声。



極めて低声こゝろこえで、

（お客様があるよ。）といつて寝返る音がした、更に寝返る音がさらした。

戸の外のものの氣勢けはいは動揺どよめきを造るがごとく、ぐらぐらと家が揺ゆらめ揺ゆいた。

私は陀羅尼だらにを呪じゆした。

若不順我呪のうらんせつぼうじや 恼乱説法者

ずはさしちぶん 如阿梨樹枝によありじゆし

如殺父母罪によしぶもざい 亦如厭油殃やくによおうゆおう

斗秤欺誑人じょうごおうにん 調達破僧罪じょうだつはそうざい

犯此法師者ほんしほつししや 当獲如是殃とうぎやくによぜおう

と一心不乱、さつと木の葉を捲いて風が南へ吹いたが、たちまち静り返った、夫婦が閨もひツそりした。」

## 二十四

「翌日また正午頃、里近く、滝のある処で、昨日馬を売りに行った親仁の歸りに逢うた。」

ちようど私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送ろうと思つていたところだ。

実を申すところへ来る途中でもその事ばかり考える、蛇の橋も幸になし、蛭の林もなかったが、道が難渋なにつけても、汗

が流れて心持が悪いにつけても、今更行脚もつまらない。紫  
 の袈裟をかけて、七堂伽藍に住んだところで何ほどのこともあ  
 るまい、活仏様じやというて、わあわあ拜まれれば人いきれ  
 で胸が悪くなるばかりか。

ちとお話もいかがじやから、さつきはことを分けていいませな  
 んだが、昨夜も白痴を寐かしつけると、婦人がまた炉のある処へ  
 やつて来て、世の中へ苦勞をしにしようより、夏は涼しく、冬は  
 暖い、この流に一所に私の傍においてなさいというてくれるし、  
 まだまだそればかりでは自分に魔が魅したようじやけれども、こ  
 こに我身で我身に言訳が出来るというのは、しきりに婦人が不  
 便でならぬ、深山の孤家に白痴の伽をして言葉も通ぜず、日を

経るに従うてものをいうことさえ忘れるような気がするというは

何たる事!

殊に今朝も東雲に袂を振り切つて別れようとする、お名残

惜しや、かような処にこうやって老朽ちる身の、再びお目にはか

かられまい、いささ小川の水になりとも、どこぞで白桃の花が

流れるのをご覧になつたら、私の体が谷川に沈んで、ちぎれちぎ

れになつたことと思え、といつて悄れながら、なお深切に、道

はただこの谷川の流れに沿うて行きさえすれば、どれほど遠くて

も里に出らるる、目の下近く水が躍つて、滝になつて落つるのを

見たら、人家が近づいたと心を安んずるように、と気をつけて、

孤家の見えなくなつた辺で、指しをしてくれた。

その手と手を取交すには及ばずとも、傍につき添って、朝夕の  
 話對手、蕈の汁でご膳を食べたり、私が櫓を焚いて、婦人が鍋  
 をかけて、私が木の実を拾って、婦人が皮を剥いて、それから障  
 ようじ  
 子の内と外で、話をしたり、笑ったり、それから谷川で二人し  
 て、その時の婦人が裸体になつて私が背中へ呼吸が通つて、微  
 妙な薫の花びらに暖に包まれたら、そのまま命が失せてもいい  
 !

滝の水を見るにつけても耐え難いのはその事であつた、いや、  
 ひやあせ  
 冷汗が流れますて。

その上、もう気がたるみ、筋が弛んで、早や歩行くのに飽きが  
 来て、喜ばねばならぬ人家が近づいたのも、たかがよくされて口

の臭いくさ婆ばあさんに洗茶を振舞ふるまわれるのが関の山と、里へ入るのも厭いやになつたから、石の上へ膝ひざを懸かけた、ちようど目の下にある滝じやつた、これがさ、後のちに聞くと女め夫おと滝たきと言うそうで。

真中つぎにまず鰐わに鮫ざめが口をあいたような先のとがつた黒い大おお巖いわが突出つぎしていると、上から流れて来るさつと瀬せの早い谷川が、これに当ふたつつて両わかに岐かれて、およそ四丈ばかりの滝になつてどつと落ちて、また暗あん碧へきに白しろ布ぬのを織おつて矢を射るように里へ出るのじやが、その巖にせかれた方は六尺ばかり、これは川の幅ひとはばを裂さいて糸も乱れず、一方は幅が狭い、三尺くらい、この下には雑多な岩が並ぶとみえて、ちらちらちらと玉すだれの簾すだれを百千くだに砕くだいたよう、件くだんの鰐わに鮫ざめの巖に、すれつ、縫もつれつ。」

## 二十五

「ただ一筋ひとすじでも巖を越して男滝おだきに縫すがりつこうとする形、それでも中を隔へだてられて末までは雫しずくも通わぬので、揉もまれ、揺られて具つぶさに辛苦しんくを嘗なめるといふ風情ふぜい、この方は姿も窈やつれ容も細かたちつて、流るる音さえ別様に、泣くか、怨うらむかとも思われるが、あわれにも優しい女滝めだきじゃ。

男滝の方はうらはらで、石を砕き、地を貫つらぬきく勢、堂々たる有ありさま様まじゃ、これが二つ件くだんの巖に当って左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸しみて、女滝の心を砕く姿は、男の膝に取つて

美女が泣いて身を震ふるわすようで、岸に居てさえ体がわななく、肉  
 が跳おとる。ましてこの水みな上なは、昨日孤家きのうひとつやの婦人おんなと水を浴びた処  
 と思うと、気のせいかその女滝の中に絵のようなかの婦人おんなの姿が  
 ありあり歴々ありあり、と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思うとまた浮いて、  
 千筋ちすじに乱るる水とともにその膚はだが粉こに砕けて、花片はなびらが散込むよ  
 うな。あなやと思うと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足まも全  
 き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱつと刻まれ、あつと見る間にま  
 たあらわれる。私わしは耐たまらず真逆まっさかさまに滝の中へ飛込んで、女滝を  
 しかと抱いたとまで思った。気がつくくと男滝の方はどうどうと地じ  
 響ひび打びかせて。山彦やまびこを呼んで轟とどろいて流れている。ああその力をも  
 つてなぜ救わぬ、儘ままよ！



滝に身を投げて死のうより、旧もとの孤家ひとつやへ引返せ。汚けがらわしい

欲のあればこそこうなつた上に躡ちゆうちよ躡するわ、その顔を見て声

を聞けば、かれら夫婦が同ひとつね衾するのまくらに枕を並べて差さしつか支えぬ、

それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりはよほどのま

しじやと、思おもいき切つて戻ろうとして、石を放れて身を起した、背う

後しろから一ツ背中を叩たたいて、

(やあ、ご坊様ぼうさま。)といわれたから、時が時なり、心も心、後う

暗しろぐらいので喫びつくり驚して見ると、閻王えんおうの使つかいではない、これが親お

仁やじ。

馬は売つたか、身軽になつて、小さな包みを肩にかけて、手に

一尾びの鯉こいの、鱗うろこは金こん色じきなる、澆はつらつ刺として尾の動きあたそうな、鮮たら

しい、その丈三尺ばかりなのを、あぎとわら願に藁を通して、ぶらりと提げ  
 ていた。何んにも言わず急にもものもいわれないでみまも瞻ると、おやし親仁は  
 じつと顔を見たよ。そうしてにやにやと、また一通りの笑い方で  
 はないて、うすきみ薄気味の悪いほくそえみ北叟笑をして、

(何をしてござる、ご修行の身が、このくらしいの暑で、岸に休ん  
 でいさつしやる分ではあんめえ、いっしょうけんめい一生懸命にある歩行かつしやり  
 や、ゆうべとまり昨夜の泊からここまではたった五里、もう里へ行つて地蔵様  
 を拝まつしやる時刻じや。

何じやの、己おらが嬢様におもい念がかか懸つてほんのう煩惱が起きたのじやの。う  
 んにや、かく秘さつしやるな、おらが目は赤くツても、白いか黒いか  
 はちやんと見える。

地体並じたいなみのものならば、嬢様の手が触さわつてあの水を振舞ふるまわれて、  
 今まで人間でいようはずがない。

牛か馬か、猿か、墓ひきか、蝙蝠こうもりか、何にせい飛んだか跳ねたか  
 せねばならぬ。谷川から上つて来さした時、手足も顔も人じや  
 から、おらあ魂消たまげたくらい、お前様それでも感心に志こころざしが堅固けんこじや  
 から助かつたようなものよ。

何と、おらが曳ひいて行つた馬を見さしたろう。それで、孤ひとつ  
 家やへ来さつしやる山路やまみちで富山とやまの反魂はんこん丹たん売うりに逢あわしたとい  
 うではないか、それみさつせい、あの助平すけべい野郎やろう、とうに馬にな  
 つて、それ馬市おあしで銭あしになつて、お銭あしが、そうらこの鯉こいに化けた。

大好物で晩飯の菜になさる、お嬢様を一体何じやと思わつしやる

の)。」

わたし  
私は思わず遮った。

しょうにん  
「お上人？」

## 二十六

上人は頷きながら呟いて、

「いや、まず聞かつしやい、かの孤家の婦人というは、旧な、

これも私には何かの縁があつた、あの恐しい魔処へ入ろうという

岐道の水が溢れた往来で、百姓が教えて、あすこはその以前医

者の家であつたというたが、その家の嬢様じや。

何でも飛騨ひだ一円当時變つたことも珍らしいこともなかつたが、ただ取り出いでていう不思議はこの医者むすめの娘で、生まれると玉のよう。

おふくろどのほおつぺた母親殿は頬板めじりのふくれた、眦めじりの下つた、鼻の低い、俗にさし乳ぢちというあの毒々しい左右の胸の房を含んで、どうしてあれほど美しく育つたものだろうという。

昔から物語の本にもある、屋の棟むねへ白羽の征矢そやが立つか、さもなければ狩かりくら倉くらの時あてびと貴人のお目に留とまつて御殿ごてんに召出めしだされるのは、あんなのじやと噂うわさが高かつた。

てておや父親ちちおやの医者いしやというのは、頬骨ほおぼねのどがつた髯ひげの生えた、見得みえ坊ぼうで傲慢ごうまん、その癖くせでもじや、もちろん田舎いなかには刈入かりいれの時よく

稲の穂が目に入ると、それから煩う、脂目、赤目、流行目が多いから、先生眼病の方は少し遣つたが、内科と来てはからツペた。外科なんと来た日にやあ、鬢附へ水を垂らしてひやりと疵につけるくらいなところ。

鰯の天窗も信心から、それでも命数の尽きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木斎の居ない土地、相応に繁盛した。

殊に娘が十六七、女盛となつて来た時分には、薬師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたというて、信心渴仰の善男善女？ 病男病女が我も我もと詰め懸ける。

それというのが、はじまりはかの嬢様が、それ、馴染の病人には毎日顔を合せるところから愛想の一つも、あなたお手が痛みま

すかい、どんなでございます、といつて手先へ柔かな掌てのひらさわが障ると  
 第一番に次作兄じさくあにいという若いもの（りようまちす）が全快、お  
 苦しそうなといつて腹をさすつてやると水あたりの差込さしこみの留とま  
 ったのがある、初手しよては若い男ばかりに利いたが、だんだん老人としより  
 にも及ぼして、後には婦人おんなの病人もこれで復なおる、復らぬまでも苦  
 痛たみが薄らぐ、根太ねぶとの膿うみを切つて出すさえ、錆さびた小刀ひっさで引裂く医  
 者殿が腕前じや、病人は七顛しちてん八倒はつとうして悲鳴を上げるのが、娘  
 が来て背中へびつたりと胸をあてて肩を押えていると、我慢がまんが出  
 来るといったようなわけであつたそうな。

ひとしきりあの藪やぶの前まへにある枇杷びわの古木へ熊くまん蜂ばちが来て恐おそろし  
 い大きな巢ねをかけた。

すると医者の内弟子うちでしで薬局、拭掃除ふきそうじもすれば総菜そうざい畠はたけの芋いもも掘ほる、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯げなんけんたいの熊蔵くまぞうという、その頃ころ二十四五歳さい、稀塩散きえんさんに单舍利別たんしやりべつを混ぜたのを瓶びんに盗んで、内うちが吝嗇けちじゃから見附しかかると叱しかられる、これを股引ももひきや袴はかまと一いっし所よに戸棚とどの上に載のせておいて、隙ひまさえあればちびりちびり飲のんでた男が、庭掃除そうじをするといつて、件くだんの蜂はちの巣を見つけたつけ。縁側えんがわへやつて来て、お嬢様面白わたくしいことをしてお目に懸かけましたよう、無ぶ躰しつでござりますが、私わたしのこの手を握にぎつて下さりますと、あの蜂の中へ突つ込んで、蜂を掴つかんで見せましょう。お手が障さつた所だけは螫さしましても痛みませぬ、竹たけ箒ぼうきで引ひ払ばいては八方へ散らばつて体中たかに集たかれてはそれは凌しのげませぬ即死そくしでございま



すがと、微笑ほほえんで控える手で無理に握ってもらい、つかつかと行くすさまと、凄じい虫の唸うなり、やがて取つて返した左の手に熊蜂が七ツ八ツ、羽ばたきをするのがある、脚あしを振うのがある、中には掴んだ指の股またへ這出はいだしているのがあった。

さあ、あの神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛くもの巣のように評判が八方へ。

その頃ころからいつとなく感得したものとみえて、仔細しさいあつて、あの白痴ばかに身を任せて山に籠こもつてからは神変不思議、年を経ふるに従うて神通自在じんつうじゃ。はじめは体を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果はては間へだを隔へだてていても、道を迷うた旅人は嬢様が思うままはツという呼吸いきで変ずるわ。

と親仁おやじがその時物語つて、ご坊は、孤家ひとつやの周囲ぐるりで、猿を見たろう、墓ひきを見たらう、蝙蝠こうもりを見たであらう、兎うさぎも蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生ちくしやうにされたる輩やから！

あわれあの時あの婦人おんなが、墓に絡まつわられたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸われたのも、夜中に魑魅魍魎ちみもうりやうに覓おそわれたのも、思い出して、私わしはひしひしと胸に当つた。

なお親仁おやじのいうよう。

今の白痴ぼかも、件くだんの評判の高かつた頃、医者の内うちへ来た病人、その頃はまだ子供、朴訥ぼくとつな父親が附添つきそい、髪かみの長い、兄貴がおぶつて山から出て来た。脚あしに難澁なんじゆうな腫物はれものがあつた、その療りやう治じを頼んだので。

もとより一室ひとまを借受けて、逗留とうりゆうをしておつたが、かほどの  
 悩なやみは大事おほごとじや、血も大分だいぶんに出さねばならぬ、殊ことに子供、手を  
 下おろすには体に精分をつけてからと、まず一日に三ツずつ鶏卵たまごを飲  
 まして、気休めに膏藥こうやくを貼はつておく。

その膏藥はを剥はがすにも親や兄、また傍そばのものが手を懸けると、  
 堅かたくなつて硬こわばつたのが、めりめりと肉にくツついて取れる、ひ  
 いひいと泣くのが、娘が手をかけてやれば黙だまつて耐こらえた。

一体は医者殿、手のつけようがなくなつて身の衰おとろえをいい立てに一  
 日延ひばしにしたのじやが三日経たつと、兄を残して、克明こくめいな父ててお  
 親やは股引ひざの膝ひざでずつて、あとさがりに玄関いのちから土間たすへ、草鞋わらじを  
 穿はいてまた地つちに手をついて、次男坊いのちの生命たすの扶たすかりまするように、

ねえねえ、というて山へ歸つた。

それでもなかなかはかど撈取らず、七日も経つたので、後にあと残つて附添つていたあにじゃびと兄者人が、ちようど刈入で、この節は手が八本も欲しいほどいそが忙しい、お天気模様も雨のよう、長雨にでもなりますと、やまばたけ山 畠 にかけてがえのない、稲が腐つては、うえじに餓死でござりまする、わし総領の私は、一番のはたらきて働手、こうしてはおられませぬから、ことわりと辞をいって、やれ泣くでねえぞ、としんみり子供にいい聞かせて病人を置いて行つた。

後には子供一人、その時が、こちようさま戸長様の帳面前とし年紀六ツ、親六十でこ児が二十なら、はたち徴兵はお目こぼしと何を間違えたか届が五年遅うして本当は十一、それでも奥山で育つたから村の言葉も碌ろく

には知らぬが、りこ伶俐な生れで、ききわけ聞分があるから、三ツずつあいかわらずたまご鶏卵を吸わせられるつゆ汁も、今に療治の時残らず血になつて出ることと推量して、ベそを搔かいても、兄者が泣くなといわしつたと、耐えていた心の内。

娘なの情なさけで内と一所ぜんに膳を並べて食事をさせると、沢庵たくあんの切きれをくわえて隅すみの方ひきこへ引込むいじらしさ。

いよいよ明日あすが手術という夜は、皆寐みん静しずまつてから、しくしく蚊かのように泣いているのを、手水ちようずに起きた娘が見つけてあまり不便ふびんさに抱いて寝てやった。

さて治り療ようじとなると例のごとく娘が背後うしろから抱いていたから、脂あぶら汗あせを流しながら切れものが入るのを、感心にじつと耐えた

のに、どこを切違えたか、それから流れ出した血が留まらず、見る見る内に色が変わつて、危あぶなくなつた。

医者も蒼あおくなつて、騒いだが、神の扶たすけかようよう生命いのちは取留まり、三日ばかりで血も留つたが、とうとう腰が抜けた、もとより不具かたわ。

これが引摺ひきずつて、足を見ながら情なそうな顔をする。蟋きりぎりす 蟀蟀がもがれた脚あしを口くわに銜くわえて泣くのを見るよう、目もあてられたものではない。

しまいには泣出すと、外聞すこじれもあり、少焦おそろで、医者おそろは恐しい顔をして睨にらみつけると、あわれがつて抱きあげる娘の胸に顔をかくして縫すがるさまに、年としごろ来随ずいぶん分ぶんと人を手がにかけた医者も我がを折つ

て腕組うでぐみをして、はツという溜息ためいき。

やがて父親てておやが迎むかえにござった、因果いんがと断念あきらめて、別に不足いはい

わなんだが、何分小児こどもが娘の手を放れようといわぬので、医者も幸さいわい、言訳いわけかたがた、親兄おやあにの心をなだめるため、そこで娘こに小児こどもを家まで送らせることにした。

送つて来たのが孤家ひとつやで。

その時分はまだ一個の荘そう、家も小二十軒こあつたのが、娘が来て一日二日、ついほだされて逗留とうりゆうした五日目から大雨が降ふり出した。滝くつがえを覆おすようおやみで小歇こもなく家に居ながら皆簞笠みんなのかさで凌しのいだくらしい、茅葺かやぶきの繕つくろいとななりをすることはさて置いて、表の戸もあけられず、内から内となり、隣同士、おうおうと声をかけ合つてわずかにまだ

人種ひとだねの世に尽きぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠こもると九日目の真夜中から大風が吹出してその風の勢せいここが峠とうげというところであちまち泥海どろうみ。

この洪水こうずいで生残せいざんしたのは、不思議にも娘と小兒こどもとそれにその時村から供をしたこの親仁おやしばかり。

おなじ水で医者の内も死絶しにたえた、さればかような美女が片田かたいな舎かに生れたのも国が世がわり、代だいがわりの前兆ぜんせうであろうと、土地のものは言い伝えた。

嬢様は帰るに家なく、世にただ一人となつて小兒こどもと一所に山に留とどまつたのはご坊が見らるる通り、またあの白痴ばかにつきそつて行ゆきとど届きとどいた世話も見らるる通り、洪水の時から十三年、いまになる



まで一日もかわりはない。

といい果てて親仁おやしはまた気味の悪い北叟ほくそえみ笑。

(こう身の上を話したら、嬢様を不便ふびんがつて、薪まきを折つたり水を汲む手助けでもしてやりたいと、情かかが懸ろう。本来の好すき心、いい加減な慈悲じひじゃとか、情じゃとかいう名につけて、いつそ山へ帰れたかんべい、はて措おかつしやい。あの白痴ばかど殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換かわりにやあ、嬢様は如意にょい自在、男はより取つて、飽あけば、息をかけて獣けものにするわ、殊ことにその洪水以来、山を穿うがつたこの流は天道てんとうさま様がお授けの、男を誘いざなう怪あやしの水、生命いのちを取られぬものはないのじや。

天狗道てんぐどうにも三熱の苦惱くのを、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸むねが瘦やせて

手足が細れば、谷川を浴びると旧もとの通り、それこそ水が垂るばかり、招けば活いきた魚うおも来る、睨にらめば美しい木この実みも落つる、袖そでを翳かざせば雨も降るなり、眉まゆを開けば風も吹くぞよ。

しかもうまれつきの色好み、殊ことにまた若いのが好すじやで、何かご坊にいうたであろうが、それを実まこととしたところで、やがて飽あかれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、たちまち形が変ずるばかりじや。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐おおあぐらで飲む時の魔神の姿が見せたいな。

妄念もうねんは起さずに早うここを退のかつしやい、助けられたが不思議いのちみようがなくらい、嬢様別してのお情じやわ、生命冥加いのちみようがな、お若いの、

きつと修行をさつしやりませ。とまた一ツ背中を叩いた、親仁は鯉を提げたまま見向きもしないで、山路を上の方。

見送ると小さくなつて、一座の大山の背後へかくれたと思うと、油 旱の焼けるような空に、その山の巔から、すすくと

雲が出た、滝の音も静まるばかり殷々として雷の響。

藻抜けのように立っていた、私が魂は身に戻つた、そなたを拝

むと齊しく、杖をかい込み、小笠を傾け、踵を返すと慌しく一散

に駈け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨、親仁が婦人に齎

らした鯉もこのために生きて孤家に着いたろうと思う大雨であ

つた。」

高野聖はこのことについて、あえて別に註して教を与えはし

なかつたが、翌朝たもと袂を分つて、雪中山せつちゅうやまごえ越にかかるのを、名残なご  
惜りおしく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第しだいに高く坂道を上のぼ  
る聖の姿、あたかも雲に駕がして行くように見えたのである。

(明治三十三年)

# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 泉鏡花」筑摩書房

1991（平成3）年10月20日 第1刷

1995（平成7）年8月15日 第2刷

底本の親本：「現代日本文学大系5」筑摩書房

1972（昭和47）年5月15日

初出：「新小説 第五年第三卷」春陽堂

1900（明治33）年2月1日

入力：真先芳秋

校正：林めぐみ

1999年1月30日公開

2012年4月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 高野聖

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>